
とある次元の幻影燈機

幸坂師宣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある次元の幻影燈機

【Nコード】

N9873M

【作者名】

幸坂師宣

【あらすじ】

ほとんどつていうか全部オリキャラで進行させてます。

本編の事件の傍流でネクラ少年とおせっかい少女が奔走する話です。当時は能力を自作するのが楽しくて楽しくて．．．とにかくそれらを活躍させたくてガリガリ書いてた覚えがあります（笑）

文体は原作に近づけようとして出来損なった感がありますが、大目に見て下さい；

最後までお付き合い頂けると嬉しいです。何卒よしなに

第一章 前日 J u m m i n g | H e r t z | L e v e l 1 .

> i 1 0 2 0 9 | 1 4 6 7 <

第一章 前日 J u m m i n g | H e r t z | L e v e l 1 .

「あーめんどくせー」

七月十一日 p.m. 5時37分、第七学区鶴来浦高等学校校門前。その生徒である辻霧^{つじきり}単はちょっとしたトラブルに頭を抱えていた。橙色の夕日に照らされて長く伸びた影は、ただでさえ育ちすぎたもやしの様に細身な彼の体をさらに引き伸ばして路上に投げかけている。その隣にもう一人分の影があった。辻霧よりかは幾分健康そうなシルエットである。

「今日という今日こそ吐いてもらうからね。アンタの能力」

辻霧の前で仁王立ちしてるのは同じくらいの歳の少女だった。ショートカットの髪型から若干ボーイッシュな印象を受ける。

少女は名を明日原^{あすはら}早苗^{さなえ}という。

尋問を受けている辻霧が主に気にしているのは彼女の背負っている身長^{身長}の約三分の二くらいの長さの黒いソフトケースだった。

金属バット。

こいつの神経なら迷うことなく自分の頭でホームランを叩き出しそつだから恐い。

「だーから別に良いじゃん……そんな些末なこと気にするとかさーめんどくさいだろ」

話ごく単純で、まあ要するに辻霧とはある事情でこの間うつかり自分の能力の一端をこのお節介なソフトボール部の少女に見られ

てしまったのだ。極力他人との距離を測り、目立たないでいることを日々の目標に掲げている辻霧にとっては致命的なミスだった。ましてや見られた相手がこの若干16歳にして好奇心だけは幼稚園児並みという明日原早苗とあつては。

（最悪だ……）

この明日原という少女、五体を以て「青春」の二字を表現しているような人間である。いや、一人で青臭い思い出作りに励んでくれているだけならまだ良い。辻霧にとって最優先で懸念すべき事項は彼女がお節介にもその勝手に謳歌するに留めておけば良いであろう「青春」を叩けば増えるビスケツトを与えるが如く周りにも散布していることだった。例えばクラスで孤立している人間に救いの手を差し伸べるとか。

そういつた押しつけがましい善意に対する回避の策として、ぎりぎり孤立しているわけではないように見える立場を辻霧が築き上げるのにどれほどの月日を要したか。その努力があの日水の泡と化したのだった。

「ありえねー、本当……」

「ちよつとねえ！ 話を聞きなさいってば」

「あ、UFO」

「ウソ！」

「ダーツシュー！！」

興味本位で何にでも手を出す相手なら別な物に興味を向かせれば良い。まさかあそこまで古典的な手に引つかかるとは仕掛けた辻霧本人さえ予想だにしなかったのもまた事実だが……

「だーっはっはー！！」

とりあえず、逃げる。

無いはずのUFOを探し出すべくあらぬ方向の夕焼け空を凝視し始めた明日原を置いて、辻霧は反対方向の人混みの多い通りに向かって時速30キロで駆けだした。

ところが十秒で二つ妙なことに気付いた。まず駆け出す瞬間に見

た通りまでの距離感と今現在見ている通りまでの距離感が全く変わっていない

まるで録画した映像が知らぬ間に巻き戻されていたかのように。そしてもう一つ。制服のセーターの襟首を万力のような握力で掴んで離さない感覚が。

首をギチギチと鳴らしながらゆっくり振り返ると、予想通り。

明日原が左手で辻霧のセーターを掴んで獰猛な笑みを浮かべていた。

「その程度の速さであたしの『アポーターション強制移動』から逃げ切る算段付けられてたとしたら、随分ナメられたものね」

「あーそんな能力だったなー」と重ね重ね露見する己の迂闊さに改めて内心舌打ちする辻霧。

『強制移動』。

十一次元上の絶対座標の理論に基づき、指定した物体を強制的に自身の元へ「引き寄せる」能力。
が、

「……とは言ってるけどお前のそれって実質レベル2判定なんだろう？」

「あんもうつつさいわね！」

キーツと歯噛みすると同時に空いている右手で道路に金属バットをケースごと叩きつける明日原。情けないことに「ひっ」という悲鳴が微かに辻霧の喉から漏れた。

確かに『強制移動』は実質自分自身の座標を基点としなければ発動できない未完成の能力であることは否定できない事実である。校内での成績に関しては他の追隨を許さない領域であるにも関わらず、かいほう記録術システムスキャンに関しては芳しくない明日原さんなのであった。

「これでも身体検査では『エクスペクタブル発展途上』って呼ばれてるんだから！」

あーそーですかばーかばーか。

耳元でぎゃーぎゃー言われながら辻霧はもうどーでもいいやと半ば達してはいけな方向性で悟りの境地に達していた。

そこに、

「あーすはらア」

妙に間延びした女性の声が飛び込んできた。

あらかわ ははまき

新河幅揮という名なら人間関係にある程度距離を置いている辻霧でも何度が聞いたことがあった。パッキパキの金髪に染めたロングヘアと片耳にアンバランスにぶら下がった大量のクロムハーツなピアスから彼女の素行の悪さが10キロ離れていてもぷんと匂ってきそうだった。度重なる生活指導ひわたの陽和田からの注意に対しても馬耳東風の姿勢を貫き通し、それでかつ停学を免れているのは彼女の記録術の好成績によるものだ。と辻霧は聞いたことがある。

そしてこんな不良でも自らのネットワークに取り入れてしまっている明日原の顔の広さは最早驚異的であると言う他無かった。

「記録術の筋垣すじがきがまだ校内に残ってんなら呼んでこいとサ」

まさに辻霧にとつては青天の霹靂、天から降って湧いた幸運だった。金髪ピアスの天使がいるよおかーさん。

「ええええ……くっ……この好機を棒に振るなんて……」

が、いかに他人へのいらぬお節介に日々身を尽くす明日原といえども教師の命令には逆らえないようだった。

肩越しに小物の悪党がヒーローに吐くような捨て台詞を辻霧に向かってひとしきりばんばん投げつけながら、明日原は足音も荒く立ち去った。あそこまで己の欲望に忠実だと、逆に尊敬に値するような気がしてきて恐い。

これが畏怖の念ってやつか……と妙に間違った解釈に納得しつつ胸をなで下ろしていた辻霧に、服装違反の塊が声をかけてきた。

「まーあアンタも難儀なもんだナ」

「あら？　もしかして貴女もかつてはアレに巻き込まれたクチでせう？」

「似たようなモン」

放つといたらタバコでも一服しそうな雰囲気で答える新河。

「まあ突発的なもんだしいつものことだから大目に見てやってくれヨ。いっそ流されちまうのも一興かもナ。付き合い始めたら割と良

いやッだったぜ、アイツ」

「……俺は俺のスタイルで初志貫徹するつもりなんで」

「あ、ソ」

んじゃあばヨ、と軽く手を振って歩み去る新河の背中をちよつと見てから、辻霧は学校を後にした。

辻霧の住む学生寮は第一八学区にある。あえて学区外の高校に進学したのも彼なりにクラスメイトとの距離感を調節するためだった。一週間ほぼ毎日この調子だった。

日常を「自分自身をより大衆に埋没させるために必要なルーチンワーク」としてしかとらえていない辻霧にとって、迷惑ではないと言えは嘘になる。基本的に何でも「めんどくさい」の一言で済ませようとする性格からしてみれば面倒極まりなかった。

それなら引きこもるなり学校やめるなりすれば良いという見方もあるだろうが、それは避けたかった。社会問題的な意味で。

辻霧が学校に通っている理由なんて精々「学歴が欲しいから」くらいだった。

他人の事情に深入りするとロクなことにならないという経験は嫌と言っただけであつたから。

（その点、明日原はどうなんだろうなー）

自分の事情と相手の事情を共有する輪を広げるという行為が辻霧にはあまりよく理解できない。

第一八学区で下車し、駅を出てからも考え事をしながら歩いていると、反対側から歩いてきた十代後半くらいの不良のグループにぶつかってしまった。

「……ッて」

「どこ見て歩いてやがるブロッコリー頭がア！！」

どうやらぶつかつた時に不良が持っていたアイスクリーム（笑）を盛大に不良の服の前側にべったりぶちまけてしまったらしかった。激昂した不良を前に危機感が麻痺しているのか冷静に分析してしまう辻霧。

しかしプロッコー頭、か。確かに辻霧は割と自分の身だしなみには気を使わない方だし、髪を切ったのも今では何年も昔のことのような気がする。よくボサイ、と人に言われるし。

出会って十秒くらいでよくも的確に愉快的なニツクネームを付けたもんだーわっはっはと辻霧が路上に尻餅を付きながら素直に感心している、ぶつかつた連中の視線にこもる殺気が炭酸飲料にラムネを一粒落としたときと同じくらいの激しさでもってぐんと増したような気がした。

て言うかやばい。どう考えても学生の格好には見えないわけですが。

「なあああアにニヤニヤしクサツとんじやいワレうたるツぞぬしゃああアア!!!!!!!!!!!!」

何これ何弁ですかつか言ってること分かんないつば飛んでくる巻き舌多い怖い。

一瞬で軽い恐慌状態に陥った辻霧の襟首を掴んで立たせると畳みかけるような怒濤の方言ラッシュ。ていうかつば汚い。汚いっつーに。

「おい妹綴まいとじ」

後ろの方にいた痩せた背の高い男が声をかける。辻霧の胸ぐらを掴んで絶賛クレーム中の男は妹綴という名前らしい。

あ？ と鼻息荒く振り返った妹綴にぼそぼそと何か耳打ちする男。辻霧には会話の内容は聞こえないのだが、それを聞いた妹綴がいやーな笑みを浮かべていたところからしてどうやら少なくともつばが飛んでいるから自重しろといった内容ではないようだ。

「そオカア……お前どうやら能力者らしいなア。悪イがオレらも一応『スキルアウト』に縁があるもんだからよオ……ちょっと落とし前の付け方も派手にやらせて貰うぜ」

あれ？ 俺路地裏に連行されてね？

それから二十分後の話である。

通行人から「高校生が不良に路地裏に連行された」との通報を受けて駆けつけた風紀委員の報告によれば、現場には既に明らかに返り討ちにされたりしき不良の男が七人転がっていた。

全員極度の興奮、混乱状態に陥っているらしく、詳しい事情調査に関しては困難を極めたが、七人とも口走った証言の内容は概ね一致していた。

何、を、さ、れ、た、の、か、全、く、理、解、で、き、な、か、つ、た、と。

かがみおおじ まきな

鏡大路時奈は第十八学区のコンビニにいた。

本来彼女の属する常盤台中学校は第七学区にあるはずなのだが、わざわざ彼女が電車代をかけてここまで足を運んで来たのには理由がある。

1270ページの分厚い雑誌の立ち読みを終え、三冊目の週刊誌に手を伸ばしかけたときに、コンビニのウィンドウ越しにその「理由」が歩いて来るのが見えた。

平均的な身長の子男子中学生だ。しかし全体的に「男らしさ」とは無縁の外見をしている。耳を覆うくらいの柔らかい黒髪と、「小学校中学年です」と主張しても納得できてしまいそうな童顔。

鏡大路がアイスを買ってからコンビニを出て声をかけると、伏し目がちに歩いていた少年は顔を上げて軽く笑みを浮かべた。

「時ちゃん」

「駄目だろ透通。この時間に一人でふらふら歩いてたら」

透通と呼ばれた少年

さかひつすきとお
逆浦透通は、左腕にピンで留め

てある緑色の腕章を引っ張りながら口を尖らせた。

「これから風紀委員の詰め所に寄ってから帰るから大丈夫だよ」

人口にして二三〇万人の学生が日々超能力の開発に勤める学園都市。そこで度々起こる能力を駆使した少年犯罪を取り締まり、治安維持に奔走する選抜された生徒の集団である風紀委員は、透通の様なお世辞にも強靱とは言い難い一介の少年には重すぎる任ではないのか、と時折鏡大路は危惧する。

それよりも現在鏡大路が心配しているのは最近第一八学区で多発している能力者による通り魔事件だ。今日鏡大路が逆浦の下校に付き添おうと第一八学区まで足をのばしたのもこれが理由だった。

夕方頃に人気のない道を歩いている生徒を路地裏に引きずり込んで襲うという悪質な手口で、五日間ですでに犠牲者の数は二桁に上るという。

「それなら別に良いが……寧ろお前が風紀委員だからという理由で襲われないか心配だな」

アイスのパッケージを開けながらなおも三歳年下の従弟の身を案じる鏡大路の言葉に逆浦は若干不機嫌そうな表情になった。

「大丈夫だよ。と言うより僕が時々ちゃんを心配してるんだ」

「？」

怪訝そうな顔をした鏡大路に逆浦は疲れた様な顔で言った。

「一連の通り魔事件なんだけどね、被害者は全員レベル3以上の高位能力者なんだ」

「……………不自然だな……………」

思わず鏡大路がぼつりとつぶやいた。

能力者が無能力者^{レベル0}を襲う「狩り」が一部の学区の裏で横行しているという反吐が出るような話ならたまに聞くことがある。

しかし今回の事件における被害者は全員高位能力者だ。

一応鏡大路も常盤台中学が擁する四十七人の大能力者の一人である。逆浦の話が本当ならば確かにこの場において犯人に狙われるのは自分の可能性が高い。

逆浦は続ける。

「それだけでも変なだけだね……全員手口が違う、というのか」

「手口が違う？」

「その……被害者は全員自分自身の能力で傷付けられたような痕跡があるんだよね」

それを聞いて鏡大路は自然と歩調を落とした。

自分自身の能力で傷付けられた。

パイロキネシスト

発火能力者が火傷を負うようなものだろうか。

鏡大路が眉間に皺を寄せて黙り込んだのを見て、逆浦は心配そうに顔をのぞき込んだ。

「時ちゃん？」

「ああ、すまん」

鏡大路は顎に添えていた手を離すと、何でもないよと言う風に苦笑して見せた。

「……てことは犯人の能力は自分が受けた能力をそのまま相手に返す能力、か？」

「にしてもおかしいんだ」

逆浦の表情は冴えない。

「それならもつと集中的で大きなダメージが被害者の身体にあるはずなんだ。でもどつちかというとか当てずっぽうに跳ね返した能力が分散して何発か偶然当たったみたいなの……」

「……腑に落ちないな……それじゃ書庫バンクに検索をかけることもままならないじゃないか」

それを聞いて逆浦が思い出したように言った。

「そういえば二週間前に第十八学区内のデータベースに誰かが侵入した形跡があつたな……」

「通り魔か？」

「いや……うまく痕跡を消してたから明確には誰とは断定できないけど……僕はその線が濃いと思ってる。実際警備員もその方向性である程度調査してみるって方針になったみたいだし」

学区内の学生のデータベースさえ手に入れば性格に標的を絞ることが出来るからだろう。犯人は今もデータベースから抽出したリストの被害者の欄に舌なめずりしながら撃墜^{キル}マークを付けているかもしれないのだ。

その時、不意に逆浦が目を見開いた。

「どうした？」

鏡大路が声をかけると、逆浦は視線を固定したまま答えた。

「何か聞こえた」

鏡大路の体に一気に緊張が走る。彼のこの何気ない言葉が緊急を意味していることを鏡大路はよく知っていた。

『妨害聴覚^{ジャミングヘルツ}』。レベル1でありながら彼が風紀委員に選抜された理由はこの能力による影響が大きい。大気中に存在する波と名の付くもの全てから指定したものにのみ干渉し、雑踏の中で交わされる会話を盗聴したり電波によるやりとりを妨害したりと、要は情報戦に役立つ能力ということで重宝されたのだ。逆浦本人は「盗聴能力なんてイヤだよ」と度々鏡大路に愚痴をこぼしていた。

目を見開いたままの逆浦の口から、読みにくい筆跡の文字を解読するような機械的な声が切れ切れに紡ぎ出される。

「別働tイカr……n絡ヲ確認、Ch……ATM取……外s……作業ヲ終エタ後別m……ルマ……ランデ……ポイント二t……機。武装班……三人毎二分ケ、アシ確hヲ終……A班、r……デ……ip……マデ移動ch……ノC班二随行サセ……」

「また随分と平和的でない内容だな」

緊張した面もちに引きつった笑みを浮かべる鏡大路。

その時、

ゴバツ！！と音を立てて通りの向こうの銀行の壁が吹き飛んだ。

まばらな通行人たちが悲鳴を上げて逃げ出す中、粉塵の中から武装した覆面の強盗が数人飛び出してくる。

「やれやれだな……警備員もしばらく来ないだろうし。逆浦、下がってて良いぞ。あ、あとこれ持つてて」

冷静にそう指示を出し、食べかけの「ガリゴリ君メロンソーダ味（おみくじ棒付き）」を預ける鏡大路。

「え？ あ、ちよつと待つて……」

逆浦が止めようとするのも聞かず、鏡大路は逃げ出す大衆の動きとは逆方向に歩き始めた。

強盗達としては予想外の動きだったようだが、一人が鏡大路を高位能力者と判断したのか、隣の仲間が制止するのも聞かずあるところか肩に担いでいたミサイルランチャーをぶつ放してきた。

H S M R - 6 4。学園都市では約5年前に生産されたモデルだが、一介の強盗が所持するにしては莫大すぎる破壊力と殺傷力を秘めている。

「おい冗談だろ……」

それを見て鏡大路はぎょつとして前に一歩出た。

次の瞬間すさまじい速度で飛んできたミサイルを鏡大路は片手で受け止めていた。慣性の法則に従ってミサイルの発射と共に吹いた風が鏡大路の前髪をわずかに揺らした以外は特に何か反動があったわけでもない。少女が触れた瞬間、まるでビデオの一時停止のボタンを押したようにピタリとミサイルの動きが「静止」した。

「……こんな前時代的な武装で私に立ち向かうなんて」

警備員は何をしているんだ、と鏡大路は呆れたように呟く。その右手が受け止めているミサイルがバキッ！！という音と同時に真っ白になった。より正確に言うならば、突然摩擦弾頭フレイムクラッシュによって25

00度まで熱されていたミサイル全体が霜に覆われたのだ。

自分が受け止めたミサイルにすでに興味をなくした鏡大路はさらに強盗達に歩み寄る。H s M R - 64を受け止められたことでパニック状態になったらしき強盗達は、反対側の通りから走ってきた盗難車だと思われる装甲板で固められた四輪駆動車に慌てて乗り込むと、ドリフトをかませながら猛スピードでその場から逃げ出そうとした。

逃げ出そうとした、というのは、彼らが乗り込んだ途端鏡大路の手から発された氷の槍が装甲車に装備された防弾ガラス製のバックガラスからフロントガラスまでを貫通し、装甲車を氷漬けにしていたからだった。

鏡大路はシャフトまで固まったらしく全く動かなくなった装甲車に近づく。乗車していた強盗は全員奇跡的に槍の射程上にいなかったらしい。

凍ったガラス越しに恐怖の視線を送る強盗達に向かって鏡大路は装甲車に手を付きながら、できる限り暖かく柔和な微笑みを浮かべ、丁寧な口調で話しかけた。

「今から車内に存在する大気中の気体分子の運動を全て静止させます。投降するなら今ですよ」

声が届かなかったのか、あるいはまだ抵抗する気があったのか、強盗達は怪訝そうに顔を見合わせた。

なおも言葉を続ける鏡大路。

「えーと……ご理解いただけない様なので噛み砕いて説明させてもらいますと」

「今からこの車ブツ潰すって言ってたんだよ」

その言葉と同時に。

ゴベキヤアツ！！！！　というすさまじい破碎音と共に装甲車は圧縮したアルミ缶のように内側に向かつてつぶれた。防弾ガラス製の窓も全て粉々になって車内に吹き飛ぶ。その隙間からマイナス273度の氷の塊が大量に突き出ていた。

イカれた芸術家が感情に任せて製作した奇妙な形のオブジェのようになった装甲車を路上に放置したまま、鏡大路は今し方ふらりとトイレに席を立った後のような気軽さで逆浦のところに戻ってきた。逆浦は呆れたように、

「だから警備員が来るまで待った方がいいと思っただけだね……
時ちゃんアフソリユートゼロの『通行止め』は加減できないから……」

「動けないようにしときゃいいんだろ、要は」

そう言いながら鏡大路は逆浦の手から食べかけのアイスを受け取る。先程預けたときから全く溶けていなかった。

その時、

「『触れた物体の質量、熱量、体積に関わらず慣性を無視してその運動状態を『静止』にする事ができる能力』、ねえ……まー面白いもん見せてもらった」

野次馬の群の中から聞こえてきた賞賛とパチパチという軽薄そうな拍手に、鏡大路と逆浦は振り返った。

Vネックの紺色のセーターを着た全体的に色素の薄い男だった。染めたわけでもないボサボサの天然の茶髪と白い肌が、群衆の中でも際立った外見である。それでも風景に溶け込むような印象であるのがやけに不気味だった。

隣にいる逆浦が警戒するように身じろぎしたのを見て、鏡大路が声をかけた。

「辻霧」

「相変わらずだなあ、『通行止め』」

ポケットに手を入れて旧友に再会したようなくだけた口調で話す辻霧。だが言葉の調子とは裏腹にその顔は一見無表情だった。鏡大路も彼とは割と長い付き合いで気付いたのだが、こいつは感情が表に出にくい性質らしい。

「大方その辺の野次馬に混じって見物してたんだろう。お前が手伝ってくれば遙かに楽だったんだろうがな」

「いや、ちよつとした面倒事に巻き込まれちゃって、な」

「まあお前の場合そうでなくても手助けなんて真似はしないんだろうが」

「おーよくわかってるじゃんと感じた辻霧から軽い舌打ちと共に顔をそむける。

「んじゃ俺六時半から見たいテレビがあるんで」

「おう。早めにくたばれよ」

おおよそ一方的にバイオレンスな挨拶を交わすと、辻霧の姿は人混みに紛れてやがて見えなくなった。

しばらくしてから今まで黙っていた逆浦がじととした声で尋ねてきた。

「……………誰？ あの人……………蒔ちゃんの友達？」

「ん？ ああ……………まあ、知り合い、だな」

「……………彼氏？」

「そう見えたか？」

言われてから逆浦自身も馬鹿な質問をしたと思ったのか、ばつの悪そうな顔で「全然」と答えた。

「さて、と」

鏡大路は軽く伸びをすると、そろそろ警備員の車両が集まり始めた事件現場の方を見やった。

「と言うわけで取り調べやら何やら巻き込まれると面倒だし、私はここで退散させてもらっから」

「え？ でも……………」

「あーアレに関しては付近にいた見ず知らずの高位能力者の方が善意の下に天誅を下しました、とでも言い訳しておいてくれ。幸い私はこの学区の生徒じゃないから、足も付かないだろう」

それじゃ、と鏡大路は事件現場を後にした。

そして。

その後ろ姿を遠くから凝視する人影があつた。

第二章 七月十二日 Absolute Zero Level 4 .

第二章 七月十二日 Absolute Zero Level 4 .

七月十二日、先日で第一八学区における通り魔事件の被害者は二十人に達し、いよいよ学区外 of 教育機関としてもこれを無視できなくなってきたのか、その日の飛行船の側面に取り付けられた大画面^{エキシビジョン}で放送されている朝のニュースでは「第一八学区で多発する能力者による連続通り魔事件」に対する学生への注意喚起が呼びかけられていた。

「はー物騒な世の中だねえ」

辻霧単は高架橋の手摺りに身を預けたまま他人事のように呟いた。大画面では今度は見覚えのある壁に大穴の空いた銀行が映し出されている。

昨日の強盗はスキルアウトの一派だったらしく、警備員本部の武器庫で強奪を行った後逃走、その足で銀行強盗に踏み切ったらしい。ある程度組織的な動きも見られたところからして計画的な犯行だったようだ。

『……警備員側では本件に関して事件の解決に貢献した能力者を捜索しており、目撃者の証言を元に……』

アナウンサーの温度差の少ない声を聞き流しながら辻霧は手摺りから身を離すと、高架橋を降りて学区間を行き来するリニアモーターラインのプラットホームへと向かった。

時刻はとくに8時を回っていた。彼の場合基本的にあの『朝のホームルーム開始10分前の馴れ合いの空気』が苦手なので、それを回避すべく遅刻ギリギリの時間に教室に到着するよう計算して登校している。

まだ生まれたての活気が足下を漂う地下街から階段を上ってホームに到着すると、見覚えのあるポニーテールの少女とばったり出くわした。

「あらー？ 鏡大路さんじゃないの」

「………… お前か」

「……………」

出会い頭そこまで露骨に嫌そうな顔されると、ねえ。

心の傷は表情の奥に引込めて、構わず辻霧は話しかけた。

「お前の住んでる寮って第七学区の『学舎の園』の中じゃなかったっけ？」

「何でお前がそこまで私の私生活に詳しいのかについてはあえて追求しないでおいてやる。ちょっとした野暮用だよ」

「追求しない」と言っておきながら何だか心の距離感が一気に極寒の未開地レベルにまで引き離されたような気がする。

誤解のないように言っておくと、辻霧が鏡大路の住所を知っているのは、以前携帯電話番号を交換した際にパーソナルデータの欄にご丁寧に番地まで入力された状態で住所が記載されていたからだだった。多分、と言うか絶対自分でやっておいて忘れている。

変なところ律儀なくせに妙に抜けてるよな、とひそかに胸の内で辻霧は忍び笑いを漏らした。

「野暮用ねえ………… まあ俺には関係ないけど、大方昨日一緒にいたシヨタっぱい子の送り迎えってどこか」

「なっ！？ ショっ………… お、お前にはかつ、関係ないだろ！」

「うえ！？ 凶星？ ていうか俺事前に『関係ないけど』ってわざわざ予防線張っておきましたよね？ 痛い痛いやめて脛蹴らないでローファアの踵で小指を攻めないでっ！！」

リニアに乗車してから鏡大路はピリピリした空気を纏っていた。そんなに嫌なら離れて座ればいいじゃん…………と未だ深刻な小指のダメージにちよつと涙目になりつつ辻霧は思っのだが、なぜか彼女は辻霧の隣にちよこんと腰掛けていた。

最先端の防音設備でもってモーターの駆動音まで遮断されている車内は、新聞を広げる音やせき込む声なんかがやけに大きく響く。めまぐるしく移り変わる車窓の外の景色を眺めながら辻霧はのんびりと小さな声で話しかけた。

「そついや今朝のニュースでお前のこと出てたけどさ」

「……………」

「名乗り出ないの？」

「……………」あまり有名になってもあとから仲間につけ狙われたり出所したやつらからの報復やら面倒だろう。連中乗員の内半分が骨折、三分の二はひどい凍傷で内二人が意識不明らしいからな」

「うわあ……………」

鏡大路は別に自慢するわけでもなく淡々と結果を述べる。それでもその下で押し殺した感情が暴れているのを辻霧は敏感に感じ取っていた。善意の下に起こした行動とは言え、やはり人を傷つけるのはこの大能力者にとって気持ちの良いものではないらしい。「面倒」と言ったのも本当は報復に次ぐ報復で相手の身を、自分の心を傷つけるのがいやだからなのだろう。

その躊躇が、彼女がレベル5へと覚醒するのを押し止めているのだと分かっている。

「……………」

「……………」

しかし、その、何だ。

こういう空気は辻霧の苦手とするところだった。
ていうか気まずい。

（……………めんどくさいな）

そろそろ辻霧が重圧に耐えかねて口を開こうとしたところで、リアは常盤台中学校学舎の園前で停車した。

「それじゃ」

そっけない挨拶と共に鏡大路は席を立った。

「おお」

ほっとしているのかもどかしいのか、複雑な心境のまま辻霧が言った。

リニアのドアが音もなく滑らかに辻霧と「面倒事」を遮断する。それで申し訳ない。

それ以上辻霧が彼女に深入りすることはない。

辻霧が昼休みに弁当をつづいてしていると明日原がずんずんこちらに近づいてきたのであの野郎ついに昼休みで衆人環視があるつてことも構わず強硬手段に出やがったかと弁当を放って命がけの逃避行を繰り広げようとした矢先ああそういえばこいつの能力の前に逃走は無意味だったなあとか思い出してしみじみとしてる間に襟首掴まれて無理矢理座席に連れ戻されましたが俺はこれからいかなる拷問を受けさせられるのでせうと半ば覚悟を決めたりとかしてその後。

「すいません……俺故郷に残してきた病弱な妹がいて……両親も俺が十歳の時にぽっくり死んじまって……その、何とぞ命だけは勘弁して下さいや本当」

「ハア？ 何を身構えてんのよアンタは……」

捕まって四秒でパーフェクト土下座スタイルをキメた辻霧は「は？」と本日二度目の涙目で顔を上げた。明日原は珍しく金属バットは持っていないかった。

「あのねえ、アンタの能力に興味があるとは言ってもそこまで病的じゃないわよ」

「……じゃあ何の用だよ……」

「とりあえず危害は加えないから土下座はやめなさい……」

ふらふらと立たせてもらっても辻霧はなおもじめじめと疑惑の視線を送っていたが、明日原は特に気にせず呆れたように腰に手を当てて言った。

「今朝のニュース見た？」

「銀行強盗のことだったら俺は知らん。何も知らんからな」

「まだ何も言っていないでしょうが……ていうかそつちじゃなくてあたしが言ってるのは例の通り魔事件よ」

それを口に出したとき、一瞬だけ明日原の表情がかげつたように見えた。

「それを何で俺に聞くの？」

「アンタ確か第一八学区に住んでるんでしょ？」

はて、そんなことをこいつに言った覚えはないのだが。

今朝出会った鏡大路のことを何となく思い出しながら、

「いや、まあそうだとして何で？」

「何か知らない？ こう……事件現場付近に住んでる人として入ってくる情報、とか」

「無いね」

とりあえず即答した。

明日原が何か言う前にさらに続ける。

「て言うか知ってどうするの？ まさかとは思っけどお前高校生の分際で赤い蝶ネクタイの少年探偵気取りでバビツと事件解決しようとか目論んでらっしゃる？」

「うん」

「即答かよ！！ ていうか俺もさつき即答したけど！！」

「そしてアンタにもある程度協力してもらっわよ」

「流れぶつた切りで人をさらつと巻き込んでんじゃねーよ！！ てか今のやりとりでどうしてそうなった！？」

「事件現場周辺の地理に詳しい人がいれば捜査が有利に進むでしょう？ それに一緒にいればその内アンタが能力のことでボ口を出すかもしれないじゃない。まさに一石二鳥」

「きれいに纏めてんじゃねーよ！」

「補足までに言う理由は今思い付きました」

「あつれー？ 変だなー？ その前の俺を巻き込んだ理由に関してはスルーの方針ですかー？」

ぜえぜえ息を付きながら上目遣いに明日原をにらむ辻霧と余裕の

態度でそんな辻霧を見下ろす明日原。

「やおら辻霧が口を開いた。」

「はあ……………わり。俺もうお前が何考えてんだかわかんね」

「理解されようとは思わないわ。とりあえず放課後に旧体育館裏で逃げようなんて考えんじゃないわよ。アンタの逃走経路は全部絶対座標で抑え済みだし記録術の方も17ページの『大脳生理学的見地から考察する能力開発の誘発物質』に関するレポート提出で筋垣を黙らせてるから。じゃ」

一気にまくし立てると明日原は嵐のようにその場を去った。

放課後までの残り8820秒で脱走方法を考えられようか、否、できない（反語）。

こういうときに限って時が経つのが早く感じられるもので、気が付くと状況はすでに夕日に照らされた体育館裏に脅迫者と共犯者が向かい合って立っているというあまりときめかないシチュエーションに突入していた。

「さ、行きましょっか」

そう言う明日原の目には一点の罪悪感による曇りも見受けられない。

勉強に部活に行事活動に交友とまるで絵に描いたように忙しい青春ライフサイクルを絶賛エンジン中の明日原さんは実は学区外まで足を運ぶ経験に乏しかったらしい。これって単に俺が学区外探検の案内人に駆り立てられてるだけなんじゃ？ とリニアの窓に鼻を押しつけんばかりにして外の景色への興味を示す明日原を見ながらそんな疑惑を持った辻霧だが、すぐに頭を振ってその考えを追い出す。こいつの場合それだけで済む気がしない。

目的地で下車し、地下街を通って事件現場へと向かった。

「『第一の被害者、にしきむつへは錦織継葉。レベル3の『スクロールシャフト不動回転』』。要は自分自身を中心とした竜巻を作る能力ね。『戦闘があつたと思われる路地裏から15メートル離れたファミレスの裏で昏倒していたところを保護される』……か」

明日原は何やら細かい文字のびつしりと並んだコピー用紙の束を持参していた。気になって尋ねてみたところ、風紀委員の知り合いにこっそり頼んで事件のデータを手に入っていたらしい。この調子で「学園統括理事会にも知り合いがいる」と言われても今更辻霧は驚かなかった。

明日原と辻霧は事件現場を事件が起きた順に回っていった。

「次は……と、『第四の被害者、形海弧削^{なりうみこうそぎ}。レベル4の「不定形炎^{マルチフレイム}」』。出現させた火球の形状、温度を自在に操る能力で……『現場付近で全身に軽度の火傷を負った状態で保護される』……んー辻霧ー？」

事件現場である路地裏から明日原が声をかけると、辻霧は近辺のファンシーショップの横に設置されていた自動販売機で一服していたらしく、路地裏の入り口から顔を出してやる気のない返事をよこした。

道中ずつとこの調子だったので明日原はとつくに彼に喝を入れるのを諦めていた。

構わず明日原は自分の推理を報告する。

「ちよつと明日原さん気付いちちゃったよ」

「……何だよ」

「これひよつとすると被害者は全員自分自身の能力でやられてるんじゃないかな!？」

「おーすげーよく気付いたなー」

五百ミリリットルのヤシの実サイダーを一気飲みしながら気怠げに対応する辻霧。補足までに言うつと、明日原が現場を梯子して二時間目にしてようやく気付いた事実には辻霧は最初の現場へ向かう道中軽く資料に目を通した時点で気付いていた。だが心優しい彼は明日原のプライドを鑑みてその事実を伏せておく。

「……とすると犯人の能力は相手の能力を直接相手に跳ね返す能力? しかしそれにしても被害があまりに軽い……」

んむむーと「名探偵の推理ポーズ」で熟考を始める明日原だが、

助手のワトソン（仮）こと辻霧はあまりにやる気がなかった。
時刻はそろそろ7時を回ろうとしていた。

鏡大路時奈は逆浦を彼の属する手親女中等教育学園学生寮の前まで送った後、第七学区の自分の寮に帰宅すべく夜道を急いでいた。学生寮の多いこの近辺は、この時間帯だとつくに帰宅する早朝型の学生とまだ街の方に残っている夜遊び型の学生に分かれるため、特に人気がなかった。

（通り魔のことにも気にはなるが……まあもし出会ったらその時がその年の年貢の納め時、だ。逆浦のためにも、ヤツの止めは私が刺す）
そう思考しながら児童公園の向かいの塀の角を曲がったその時、

ぞわりと、

全身にかつて経験したことの無いほどの不快な感覚が走った。

（何が！？）

振り返る必要もなかった。

身構える必要もなかった。

そいつは、

身を隠すこともせず、堂々と目の前の街灯の下に姿を晒していたのだから。

「ッッッ！！」

圧倒的な敵を目の前にしたときの重圧とも違う。

不快。

ただ不快だった。

慄然として立ち尽くす鏡大路と対照的に、そいつは悠然とした態

度で構えている。まるで町中で知り合いと待ち合わせをしている途中の気長な少年のようだ。そう、高校生くらいの少年
体格からいってそう判断できるだろう

は、赤いパーカーを着込み、マイナーな球団のロゴが入った藍色の野球帽をかぶっている。その上からさらにパーカーのフード。顔を見られないようにする為の対策にも、単なるファッションのようにも見えた。

じりじりと、何時間も経ったような気がした。いや、数秒だったかもしれない。突然目の前の少年は気軽な動作で体の向きを変えると、近くの暗い路地裏に姿を消した。

（誘っているのか ？）

だとしても、鏡大路がすべきことは変わらない。

静かな足取りで、だが迷うことなく今し方少年が消えた路地裏へと近付いていく。

思った通り、さつきとまるで同じ姿勢でそいつはそこにいた。

「……………いいだろう」

知らずと鏡大路の口元には獰猛な微笑が浮かんでいた。

ゆっくりと、まるで重たい拳銃を構えるように右手をそいつの方へ向ける。

指先が、大気中の微細な分子に触れる。

「 始めようか」

そして、

第三章 七月十二日 Apportation Level 2 .

第三章 七月十二日 Apportation Level 2 .

辻霧単と明日原早苗は第一八学区のファミレスの中にいた。

「捜査」はとりあえず六人目の事件現場を見たところで一旦おひらきということになり、時間も時間だったので二人で近辺のファミレスに立ち寄ることにしたのである。

（ それにしてもねえ ）

『減量中の貴女にお勧め！ カロリー控えめチーポテグラタン』とかいうチープなメニューをもそもそ口に運んでいた辻霧はため息を吐いた。

おおよそ三時間弱歩き回ってみて、本日の成果は皆無に等しいと言っても過言ではなかった。いや、目の前で『夏こそ燃えるぜ！！ レッツチャレンジ黒毛和牛の七百グラムバーニングステーキ』を豪快に頬張っている明日原が、「そもそも現場を歩き回る以前に自宅で資料に目を通すなりして考察すれば今日得たものと全く同じ答えにたどり着いたのではないか」という根本的な部分に気付かなかっただけ、寧ろ成果はマイナスだったと言えるのかもしれない。

と言いつつ、ここまで胸中でグチを垂れている辻霧自身も実際はそれほど大した働きはしていなかった。

「お前さあ……もうちょっとと自宅で資料に目を通すとかしとけよ……」

フォークを動かす手を止めて辻霧が申告したが、果たして食事に没頭している明日原にその声が届いたかは疑わしい限りだった。

一応それは杞憂に終わったらしく、ごっくんと肉の塊を飲み込んだ明日原は、

「そりゃ目は通したわよ。でもやっぱり現場の空気に触れて初めて分かる事実つてのもあるもんでしょ？」

「ああ……そう……」

もうお気の済むまで歩き回るのがよろしいかと。

その後は二人とも黙ったまま目の前の夕食と格闘していたが、しばらくしてから先にグラタンを腹に収め終えた辻霧がまた口を開いた。

「そう言えばお前さ、何でこの事件の捜査に乗り出したわけ？」

「……………」

「『理解されようとは思わない』って言ってたけどさ。一応そこんところはつきりさせておいてくれないと俺としてもすつきりしないわけなんだが」

「……珍しいわね。アンタが何かに興味を示すなんて」

「いや……流石に自分が何のためにこんな重労働を強いられてるのかってことぐらい知りたいと思うよ」

明日原は考え込むようにステーキの欠片を咀嚼していたが、やがて、

「やっぱりね、自分の身の回りにあるものには何にでも興味を持たなきゃもつたいたいと思うわけ。こうやって自分のためだけに馬鹿やって、明日食べていくこと以外のこと考えていられるのは今だけだと思う……から」

「俺のこともこの通り魔事件の調査もその延長線上ってわけか？」

「ん。そこまで極端じゃないかもしれないけど、まあ似たようなもんかもね……あと通り魔事件の捜査に関してさらに言うとなんだけじゃない」

その時少しだけ、明日原の表情が真剣味を帯びた。

「これは人としてすべきことだと思うからやってるの。人間が他の生き物と違って与えられてる特権って分かる？ ……………高度な知能とか繁栄とか、そういう上っ面の進化論で語られるようなことを言ってるんじゃないのよ。私はそれを相手を思いやるってことだと考

えてるわけ。その形は特に決まってるわけじゃなくて……相手を敬ったり、好きになったりすることだけに限定する必要はない。例えば憎いと思ったり嫌悪することだってそういうカテゴリーに分類できと思う。詰まるところ、そういう感情だって自分にとっていいように変化して欲しいと相手を思いやることなんだから」

厄介な考え方だな、と辻霧はぼんやりと思う。

それなら自分の他人への無関心を貫き通す姿勢は、彼女の目にはどう映るというのだ。

「あたしはそれをちよつと他の人より強く意識して、信条にしてるだけ。だから身近に困ってる人がいたら絶対に見て見ぬ振りはいない。それが自分に与えられた特権で、手が届く範囲でできることができる状況なら自分の限界までやってみるのが人間ってものだと思ってるから」

「……………」

自分の実力がどうか、そのリスクがどうか一々考えているわけではない。ただ、手を伸ばす意志が自分にあるかどうか。明日原にとって重要なのはその一点に尽きる。

辻霧は黙り込んだまま明日原の言葉を反芻していた。

明日原は胸の内を吐き出してすっきりしたのか、無邪気に辻霧に話しかけた。

「今ので納得できたかしら？」

「……………ああ、一つだけよく分かった」

「？」

明日原がステーキの最後の一口を嚥下するのを見届けてから、辻霧は自分の結論を述べた。

「俺は多分、一生お前と相容れない」

明日原がきよとした顔をした。

「どういう意味……？」

辻霧は黙って席を立つとレジに向かった。明日原も仕方なく後を付いてくる。

会計を済ませてとつぷりと日の暮れた外気の中に出ると、再び明日原が尋ねてきた。

「ねえ、さっきのどういう意味って」

「俺はさ」

別人のような声で辻霧は話し始めていた。

「俺はお前みたいに強くないから逃げ続けることしかできないんだよ。思いやるだとか見て見ぬ振りはしないとかさ。他人のために自分の身を削るようなマネをするっていうその精神が理解できない」

明日原の表情は街灯の角度のせいか、よく見えなかった。

「結局互いの事情にそうやって土足で上がり込んだって必要以上に傷つくような結果しか出ないじゃないか。どいつもこいつも自己中心的な、保守的な考え方しかできないんだったら、何で俺だけが損しなきゃいけないんだ？」

だから距離を置く。

相手の心の声の射程距離より、一步離れた位置で。

「だからお前が『見て見ぬ振りはしない』なんて綺麗事並べ立ててやってる捜査にもこれ以上協力する気はない。結局お前も同じなんだよ。自分の理想を人に押しつけて、それが人を傷つけてるって自覚がないならそんなこと言える義理はないだろ？」

そして、彼女もきつとその事実を、辻霧の心の声を知って傷ついたに違いない。人が互いの射程距離に歩み寄ったとき、そこに生まれるのは単なる傷つけ合いだけだ。

明日原は何も言わない。左手の金属バット入りの黒いソフトケースを握りしめ、黙ったまま辻霧の方へ一歩踏み込む。

辻霧は動かなかった。

そして、

殴られた。

金属バットを握った左手じゃない、素手の右手で。

バシッ！　と、小気味良い音が顔の左側から響いたと思うと、辻霧はバランスを崩してそのまま路上に倒れ込んでいた。

辻霧が何か言う前に、明日原の言葉が上から降ってきた。

「何格好つけようとしてんのよ。拗ねたフリしてんじゃないわよ。そんなんできれいに纏まったと思ってんの？　アンタがどんな辛い経験したかなんて知らないけどね、そんなこと言えるってことはアンタだつてまだどこかでその考え方を信じているってことでしょ？　それでも諦めずに挑戦する意志がない時点でアンタに逃げる資格はないわよ」

殴られた左頬をなでながら、何でこいつが怒ってんだろうと辻霧はぼんやりと考えていた。

ていうか俺、怒ってた？

「それでもアンタが自分主体の保守的な考えしかできないんだつたら……　アンタは獣と同じだ。あたしはアンタを軽蔑する」

相変わらず光の具合で明日原の顔は見えなかったが、その時雨も降ってないのにぽたつと辻霧の顔の上に何か水滴が落ちてきた。

辻霧がその微かに暖かい液体が何なのかといぶかしむ間もなく、明日原はくると身を翻し、

「……………今日は手伝ってくれてありがとう。明日からは一人でやるから」

短くそれだけ言つて夜の闇に消えていった。

言うだけ言つて突然怒り出して人を殴った挙げ句支離滅裂なこと言つて泣いて消えやがる。

「……………何なんだよ全く」

後に残された辻霧はぼそりと呟くと、口の中に微かに溜まった血の塊をぺつと吐き出した。

20分後、辻霧は学区内バスを利用して自分の住んでいる寮に向かっていた。

とにかく早く帰ってユニットバスでビバノンノンしてさっさと寝て今日の出来事を頭の外へ追い出してしまいたかった。

明日原の思考回路の一端に触れたことで辻霧のアイデンティティは自分自身で思っている以上に揺さぶられていた。

（もうヤダ何なのあいつ……うおおッ!？）

突然辻霧はバランスを崩して転倒し、アスファルトに後頭部をしたたかにぶつけてしまった。一難去ってまた……というやつである。

（いつてえ……何だって七月の路上に氷……が………?）

氷?

辻霧がそろそろと立ち上がって辺りを見回してみると、夜で温度は若干下がっているとはいえ、夏のアスファルト一面が氷漬けになっていた。

（おいおい何だよこりゃ……）

さらによく見ると、アイスバーンはまるで手負いの獣が何かから逃げようとのたうち回った跡のように、乱雑でありながらある一方向へ向かって前進したような痕跡を残している。その先は

（……路地裏……?）

跡を辿っていくにつれ、惨状はさらに激化していた。

（ひっでえ………）

路地裏の地面一帯が氷漬けになっているかと思えば、壁に張り巡らされたパイプの一部分が急速に冷やされたことで粉々になっている。と、異常な空間が広がっている。

その奥に、何かが倒れているのが見えた。

「……………」

はやる動悸を抑えながら、ゆっくりと近づく。
それは

四肢を切断された、鏡大路時奈だった。

「な

」

よろよると、辻霧は思わず壁によりかかる。

何かがどうなっているのかさっぱり分からない。

唐突な日常と非日常の交錯に、キャパシティを越えた脳のヒューズが飛びそうになった。

（し、死んでるのか……？）

麻痺したような判断力で辛うじて最初に辻霧が浮かべた疑問はそれだった。

近付いて紫色に変色した彼女の唇に手をやると、微かに息はある。目を逸らしたいのを堪えて四肢の切断面に目をやると、どうやら切断されたと言うよりは四肢の付け根の部分が強力な冷氣によって壊死し、脆い粘土細工のように取れたというのが妥当だと分かった。冷たくなっているせいか血行に影響が出ており、それほど出血はしていない。

ふと、今日の明日原の言葉が脳裏によみがえる。

（ちよつと明日原さん気付いちちゃったよ）

（……………何だよ）

（これひよつとすると被害者は全員自分自身の能力でやられてるん

じゃないかな!?)

(おーすげーよく気付いたなー)

「……通り魔………?」

掠れた声が自ずと口から漏れる。

路地のさらに奥に目を凝らすと、取れた手足が順々に転がっていた。

(と……とにかく、警備員に連絡しないと………)

今の辻霧に、めんどくさいという思考は残っていなかった。

通報から約10分ほどで到着した警備員たちは手際よく鏡大路を拾い集めると、彼女を救急隊員に引き渡した。状態があまりに酷く、第七学区のとある病院に搬送されるらしい。

それと並行するように第一発見者の辻霧にも事情聴取が行われた。取り調べが全て終わったのは十二時を回る頃で、その間自分が何を喋ったのか辻霧は全く覚えていなかった。

そして翌朝。

飛行船の大画面では第一八学区通り魔事件における二十一人目の被害者が出たと報道があり、その日の鶴来浦高等学校一年B組の出欠確認では、辻霧のみ返事がなかった。

第四章 七月十三日 Back | Fire | Level 3 .

第四章 七月十三日 Back | Fire | Level 3 .

朝起きてからも辻霧は最悪の気分だった。

ものすごく気分の悪い夢を見たような気がしたのだが、思い出せない。思い出したくもない。

朝食の準備もせず、アルミパイプ製のありふれたベッドに寄りかかって長いことぼーっとしていた。このまま痛みも感じずに死ねたらどれだけ楽だろう。

明日原に投げつけられた自分のアイデンティティを否定するような言葉と、四肢を切断され青ざめた顔で転がっている鏡大路の姿が頭の中でずっとぐるぐると回り続けていた。

(……………そうだ、病院)

泥沼化した思考の中から気まぐれにすくい上げた行動指針が頭をもたげた。

(鏡大路……………どうなったんだ……………)

起きてからテレビも点けていなかった辻霧は、その日のニュースすらまだ把握していなかった。

のろのろと起き上がり、服を選ぶのも面倒だったので制服を着てから上からいつもの紺色の指定セーターを羽織った。

財布が入っているからという理由で必要もない学生鞆をひつつかみ、鍵もかけずに寮の自室を出ていく。その後は自分でもどういう道順を通ったのか分からなかったが、気が付くと第七学区の鏡大路が収容された病院の前にいた。

受付で面会の申請をして鏡大路の入院している病棟まで階段を使って行くと、丁度今し方教えてもらった病室から回診なのかカエル

のような顔をした医者が出て行くのが見えた。

カエルが廊下の向こうに消えたのを見届けてからゆっくり病室に入る。

奥の方にカーテンを引かれたベッドがある以外は、他に患者はいないようだった。

喉の奥から掠れたような、ひび割れた声がか細く漏れた。

「鏡大路？」

返事はない。

一つ咳をし、つばを飲み込んで恐る恐るといった調子で病室の中に足を踏み入れる。

一瞬ためらってからカーテンを引いた。

鏡大路は眠っていた。その顔は苦悶に歪むでもなく、穏やかだった。そして
肩から先は、点滴に繋がれた腕が、ちゃんと付いていた。

「は

」

安堵の息と共に辻霧は病室の壁にくずおれた。

シーツの盛り上がり方から見ても、どうやら彼女は無事五体満足で生還したようだ。

何だかもう、辻霧は自分が何のためにここまで来たのか分からなくなっていた。無関心な姿勢を貫き通すと言っておきながら、どうして彼女の安否を気遣ったのか。

（ そんなこと言えるってことはアンタだってまだどこかでその考え方を信じているってことでしょ？）

自分のことを客観的に見ることができていた明日原の方が、的を射ていたのかもしれない。

本当は人間に絶望できてしまった方がずっと楽だと分かっている。

そうだ。

「立ち向かうことすらしなかった俺に、確かに逃げる資格は無いな」
ふ、と辻霧の口元に自嘲するような笑みが浮かんだ。

彼女はきつと今日も無駄なのかそうでないのかよく分からない「捜査」に単身赴くのだろう。自分の中の「信条」を貫き通すために。

（もし……放課後に会えたら）

体育座りで腕の中に顔を埋めながら、そつと辻霧は思った。

（……謝ってみるか。そんで……）

彼女の中の「人間」ってやつにもう少し希望を持ってやるというのも、良いかもしれない。

逆浦透通が放課後に従姉の見舞いに病室に立ち寄ると、既にそこには先客がいた。

「……………」

一昨日のスキルアウトによる銀行強盗の時に会った高校生だ。

いつからそこにいたのか、鏡大路の眠っているベッドの横の壁に体育座りでくずおれるようにして、顔を腕の中に埋めている。肩の上下の仕方からしてぐっすり眠り込んでいるようだ。

「今朝からずっとそこにいたみたいだね？」

突然背後から響いた声にビックウツ！！と逆浦が振り返ると、そこには力エルのような顔をした背の低い医者が立っていた。

「彼女の弟さんかな？」

「あ……いえ、その……従弟です」

「ああ、そうか。とりあえず今は大丈夫だ。発見されたときは状態が酷かったんだね？」

「……………」

「そこにいる彼が発見したらしいね？ 後でお礼を言っておくと良いよ？」

「あ、はい……その、蒔ちゃんを助けて下さって、ありがとうござ

いました」

深々と頭を下げる風紀委員にカエル医者は人の良さそうな笑みで応じると、病室を出ていった。

とりあえず逆浦は眠り込んでいるらしい辻霧に近寄ると、肩に手を置いて軽く揺さぶった。

「こんなところで寝てたら風邪引きますよ……」

「ん…………ふあ…………あ？　お、いつかのシヨタ男君。シヨタ男君じゃあないか」

「シヨタ？」

首を傾げる逆浦を尻目に、辻霧は伸びと共に立ち上がった。微かにボキ、と音がする。

「くああ…………わり、今何時か分かるか？」

「えーと…………三時半くらいですかね」

「え？」

起き抜けのふわふわとした雰囲気から、突然辻霧はがらりと表情を変えた。

「マジかよ…………道理で腹減ってると思ったら昼飯食ってなかったからか…………あークソ、ちよつとマツク寄ってから行くか…………」

がしがしつと頭を掻いて立ち去ろうとする辻霧に、逆浦は咄嗟に声をかけていた。

「あの」

「ん？」

「あ…………アレです。その、時ちゃんを発見してくれたのって貴方なんですよね。聞きました。えっと、その節は本当にありがとうございました」

早口でそう言って頭を下げる逆浦を、まるで珍しいものを見たとしてもいう風にしげしげと眺める辻霧。

「お前…………」

「はい」

顔を上げた逆浦には、なぜかいつものように無表情な辻霧の顔が、

ちよつとだけ笑っているように見えた。

「……本当にそいつのこと好きなんだな」

「え？ その、え？ え？ すつ、いや、そんな」

顔が紅潮するのを止められない逆浦を見ながら、いやー分かりやすい反応だなーと辻霧は思う。

「あ、そうだ」

ふと思い付いて辻霧は病院を出る直前、風紀委員に頼み事をした。

時刻もそろそろ六時を回る頃、明日原早苗は第一八学区の八人目の被害者が出了た通り魔事件の現場にいた。

彼女なりに現場視察を行つてみて意義のあつた発見は皆無というわけではなかつた。

例えばレベル3の電撃使いである七人目の被害者の場合、周辺の

電線が何本かショートしていたのはともかく、近辺の店舗で取り扱われていた電化製品の類にまで著しく被害が及んでいた。レベル3相当の能力者ならば能力の制御もある程度慣れたものだと思われるが

（そう……まるで能力が制御を失つて暴走したような……………）

犯罪を犯した能力者の収容施設に能力者のA I M拡散力場に干渉し、暴走するようにし向けるA I Mジャマーという機材が設置されているという話は聞いたことがある。

（もしかして……通り魔の能力が相手の能力を直接跳ね返すのではなく、相手の能力を暴走させるようにし向ける『人間A I Mジャマー』のようなものだとしたら

？）

「そこにいるのは誰だ！！」

「ひゃひつ！？」

不意に路地の奥から聞こえた誰かの声に、明日原は驚いて跳び上がった。

振り返つてみると、そこにいたのは自分と同じくらいの年齢の少

年だった。赤いパーカーに紺色の野球帽というラフな格好をしている。格好だけ見ると町中で見かけるチンピラのような顔だが、その顔は普段なら穏和そうな顔立ちだった。ただし今は警戒しているのか眉間に皺を寄せている。

路地の奥からこちらに歩み寄ってきた少年は明日原の姿を認めると、微かに表情を和らげた。

「ん　　？　　おや、何だ……あの、そこで何をしているんですか？」

「あ……えっと、驚かせてしまったようすいません。ちょっと通り魔事件のことが気になって……自主的に捜査しているものです」

「！　それは奇遇ですね」

少年は完全に明日原に対する警戒を解いたのか、きゅっと目を細めて人の良さそうな笑みを明日原に向けた。

「僕も自主的に調べているんですよ……この事件」

「本当ですか！？　似たような行動をしている人がいて嬉しいですよ明日原も少年に対する警戒心を解く。少年は辺りを見回しながら気遣わしげに言った。

「……………しかしこの時間に女性一人で捜査というのは若干不安ですね……………犯人は現場に戻って来るもの、とも言いますから……………どうですか？　捜査をご一緒させていただいても？　情報をリークすることもできますし」

「あ、よろしくお願いします」

二つ返事で承諾する明日原。ついでに路地の入り口に置いていた学生鞆を『強制移動』で手元に引き寄せる。

しかし幸運だ、と明日原は胸中で呟いた。昨日辻霧と言いつたことが一日経つても胸に重くのしかかっていた。単身での捜査に心細さを感じていた矢先、協力者が見つかるとは。

「今回の事件、割と自力で調べてる人が多いらしいんですよ」

「そうなんですか？」

「はい。そう言えば十一人目以降の現場はまだ警備員が捜査中なの

で入れないそうですよ。知り合いで同じく捜査している友人からの情報なんですけど」

こんな調子で学区内を移動し、九人目の被害者が出た現場に二人は到着した。

路地の奥へと進んでいたとき、ふと少年が後ろから声をかけてきた。

「時にですね」

「はい」

「人が人を傷つけることって避ける方法があるんでしょうかね？」
路地の壁を観察しながら明日原は突然何の話だろう、と首を傾げる。

「それは……人が互いに相手を気遣うことができれば、そういうことは起こらないんじゃないですか？」

「……まあ、確かにそれがベストアンサーでしょうね。でも実質問題、それは難しい。例えばそれが可能であつたとしても、互いに心のどこかで抑圧されるものがあるはずなんです。気を遣うと言うくらいなんですから」

「……………」

「それらは自然現象であり、不可避の現実なんですよ。人と人とが接するときに完璧に傷つけ合いを避ける、なんてことはありえない。一人が集団に殴られた場合、殴られた一人が加害者全員を殴り返せば公平かつ穏便に物事が済むわけではない。その一人に全員を殴り返すことによってかかる労力」加害者が一人を殴る労力ではないからです。世の中には誕生した時点で確定するヒエラルキーが確かに存在するんですよ。加害者と、被害者に」

「あの……………」

明日原は振り返った。そして、

「さて」

少年が、パーカーのポケットから白い粉末の入った小さなケース取り出した。

その中身を何気ない動作で少年が舐めた瞬間、

ぞわりと、

全身にかつて経験したことのないほどの不快な感覚が走った。

（犯人は現場に戻って来るもの、とも言いますから
明日原の額にじっとりと嫌な汗が流れ落ちた。

）

「果たしてお前はどっちなんだろうな？」

第五章 七月十三日 Over Dimension Level 4 .

第五章 七月十三日 Over Dimension Level 4 .

明日原は路地裏を必死に走っていた。

その後ろをゆつくりと、表情に余裕の色さえ含ませながら、狂気を双眸に宿した少年が歩いてくる。

焦燥しきった明日原の体のすぐ側に、鉄パイプがガン！！ ギン！！ ゾン！！ と連続して突き刺さる まるで空間から突然現れたように。

「無駄無駄。俺の『バックファイア追尾誘爆』は相手のAIM拡散力場に干渉して強制的に相手の能力を相手の意志とは無関係に暴走させる。表向き身体検査ではAIMサーチ系の能力だと思われてるんだけどなア」

雑草を耨るような適当な感覚で明日原のAIMを掻き乱す。暴走した能力によって、今度はアルミ製のゴミ箱が明日原の頭上数センチの壁にめり込み、粉碎した。

「実際半径40メートル以内なら補足した能力者のAIMを感知できるから、逃げてても意味ねーよ。範囲内なら好きなように暴走させられるし、な」

その言葉と同時に近くのビルの壁が一箇所まるまる消失し、明日原の走っていたルートを吹き飛ばした。

「……………ッ！！」

衝撃で明日原の身体は路地に転がされ、二度三度と地面に叩きつけられる。

這いずるようにして起き上がったが、目の前は袋小路だった。逃げ場はない。

背後から嘲るような『追尾誘爆』の音が響いた。

「ハハッ、昨日の予行演習はどうやらやり損ねたらしいからよ……大丈夫だって」

「……………！」

「今度こそきつちり楽にしてやる」

『追尾誘爆』が明日原ににじり寄った、その瞬間、フツ、と。

『追尾誘爆』と明日原の間に、一辺三センチ程度の黒い立方体が何の前触れもなく出現した。

「……………」

呆気にとられる二人の前で、突然その立方体は凄まじい速度で膨張し、『追尾誘爆』と明日原を隔てる三メートルもの壁になった。

そして明日原にとって聞き覚えのあるその声は上から降ってきた。

「……………」はー、シヨタ男君に感謝だな。八人目の現場からずつと後つけてて正解だった」

彼女が咄嗟に名前を呼んだのも無理はない。

「辻霧！？」

「よう」

辻霧単は、唐突に出現した壁の上に腰掛けていた。

「アンタ、何で……………」

「ああ、気にすんな。ちよつとした発想の転換だ」

適当に返事をして手を振ると、辻霧は『追尾誘爆』に視線をやった。

「『補足した相手のAIM拡散力場に干渉して能力を膨張、暴走し、

自爆させることができる能力』、ね。レベルもそこそこあるんだろ
うが 今のお前の行動を見てて分かったことが三つある」

「なん ?」

「一つ。視覚的な障害物は『追尾誘爆』の発動を妨げる」

まるでカードゲームの説明書きを読み上げるかのように。

淡々と辻霧は事実を述べていった。

「二つ。最低でも咄嗟には『追尾誘爆』は複数の能力に対して発動
できない」

「あ……………」

「つまり、だ」

辻霧が壁を蹴って明日原の側の地面に降り立つと同時に、その材質の不明瞭な壁は現出した時とは逆に一気に収縮し、忽然と姿を消した。

そして彼は『追尾誘爆』の方を振り返りながら、
ぼそりとチエックメイトを宣言した。

「二人掛かりに対してお前は無力ってことなんだよ」

「くッ……………ハハッ……………ッ ナメてんじゃねエぞおおおおお
おおおおオオオオオオオッ!!!!!!!!!!!!!!」

『追尾誘爆』の咆哮に呼応するかのように辺りの空気がざわりと
泡立つ。

AIM拡散力場の爆発的な膨張。

視覚的な壁が取り払われたことによって、明日原の能力は再び暴走を始めた。路地裏にあったダストボックスがコンクリートの壁にめり込み、千切れ飛んだ鉄パイプが何らかのオブジェの如く地面に何十本と突き刺さる。

「二人掛かりに対して無力だア!? なもんそっちの女の能力でテ

メーを叩き潰しや済む話だろーが！！！！ 悦に入ってるじゃねー
よカスがあああああアアアッ！！！！！！！！」

さっきの操作を微風とするなら今は嵐。
数段破壊力が増している。

だがその渦中にあっても辻霧は顔色一つ変えることなく、そこに
立っていた。

いつもの様に、めんどくさそうにそこに立っていた。

「まあ人の話は最後まで聞けって……」

溜息を吐きながら辻霧は若干乱れたぼさぼさ頭をぐしゃっと右手
で掻いた。

「三つ」

「！？」

嵐のような物体の乱舞に躊躇するかのような微かな揺らぎが生じ
た。

『追尾誘爆』は気付いているだろうか。

自分自身の身体を拘束するかのように、先程の壁と同じ正体不明
の物体が四つ、今にも膨張しようとする自分の周りに浮かんでいること
に。

「『追尾誘爆』は能力を把握できていない相手のAIM拡散力場に
干渉することはできない」

その言葉が引き金だった。

バオツ！！と。

配置された四つの物体が膨張し、罪人の亡骸を包み込む棺の様な
箱を形成し、『追尾誘爆』を完全に拘束した。

箱には文字通り蟻の子一匹通す隙間も無い。

それと同時に路地裏一帯を挟り、バラバラにしていた能力の奔流もぴたりと止まった。

明日原がその場でぺたりとへたり込んだその時、拘束された箱そのものが振動するほどの絶叫が箱の内側から轟いた。何度も箱に対して内側から攻撃が加えられているようだ。

それに対してさえ辻霧はめんどくさそうに対応した。

「わり。言い忘れてたけど、その箱に対して三次元上の物理的な干渉は意味無いから」

それを聞いて『追尾誘爆』は大人しくなった。彼は完全に詰んだ状態でかえって冷静になった状態で思考する。

（クツソオ……訳が分からねー……何なんだこの能力……精々AI Mのデカさでサーチぐらいはできるが……本質が分からないことには暴発させることもできねー）

そこで彼ははたと思い当たった。

（！ 待て……そ、そーいや聞いたことがあんど……学園都市最強に次ぐ第二位の超能力者にこの世の物理法則を無視した『未元物質』ダイクマターって能力を操る垣根かきねってヤローがいること……ま、まさか……）

「テメーまさか……学園都市第二位の」

「あーごめん。それ多分人違いだ」

ひらひらーと片手を振って軽い調子で答える辻霧。さっきからシヨックでぼうつとしていた明日原は、その時になってようやく言葉を発した。

「ちょ、ちょっと待ってよ。じゃあアンタの能力って一体……」

「『オーバーデイメンション
幻影燈機』」

初めて、辻霧は自分の能力の名を口にした。

「それが俺の能力だよ。多次元に存在する物体の『影』とも呼ぶべきものを三次元上の空間に投影する。つつても俺が『自分だけの現実^{ライ}』で把握できてるのは二丁四次元まで、だけどね」

例えば四次元を三次元の物体、三次元を三次元上における二次元要するに影、に対応させるとする。この状態で一つの光源を当てた場合、無論物体に対してできる影は一つ。これが通常の状態。

だが辻霧の能力は、正規のその光源とは別の光源を作り出し、新たな影を、それも別の角度からの影を投影する。言い換えれば三次元の空間上に実在しない物質・物体がある物体を基点に新たに作り出す能力。

「……………つつても説明してる俺自身いまいちよく分かんないんだけどさ」

「そ、そんなの」

最強じゃないか。

明日原と『追尾誘爆』は同時に同じことを思った。

自分達が目になっているのは、もしかすると学園都市最強の七人に次ぐ「第八位」になり得る人間ではないのか？ と。

「まー俺はこの上を目指す気は毛頭無い」

「な、何で!？」

唐突にその幻想をぶち壊す言葉に思わず明日原が叫ぶと、辻霧は顔をしかめた。

「いやさ、それ『記録術』の筋垣にも云われたけど面倒くさいじゃん。レベル5とか。なんか『一方通行』とかいう学園都市最強も不良に襲われたりとか日常茶飯事らしいし」

「で、でも……………」

「捨てられた子猫何で拾っちゃいけないのおかーさん」とさすが小学生のような目で明日原が名残惜しげに言ったが、辻霧も辻霧で「うちのアパートはペット厳禁です」と諭す厳格な母親よろしく取り合わなかった。

「だーから人に能力のこと話すの嫌なんだって……たまにお前みたいのがいるから……」

がしがしと頭を掻き始めたところで、「お、そうだ」と何か思い付く。

「この際だしお前ら二人とも纏めて口封じしちまおう。うんそうしよう」

「ええええええええええっ!？」

さっきから拘束されたまま口をつぐんでいる『追尾誘爆』はともかく、明日原が悲鳴を上げた。

「そ、そ、そ、そーんなこと言っただって、能力のこと自分からべらべらしゃべったのはアンタでしょー!？」

「な理屈持ち出されても聞かれちゃったものは仕方が無い」
にべもない。

おもむろにポケットに手を入れて何か取り出そうとする辻霧。

これは死ぬ覚悟でもレベル2の自分が立ち向かうこともやむなし……と戦々恐々としていた明日原の予想に反し、辻霧が握っていたのはごく普通の携帯電話だった。

そしてどこかに電話をかけると、

「もしもーし風紀委員ですかー? 第一八学区ファミレス『トイコンテンポラリー』の裏で通り魔捕まえましたー。え? あ、いや本当ですって。ああ匿名でお願いしやっす。ハイ」

普通に通報していた。

がくーつと力が抜ける明日原。だがすぐに「じゃあ自分はどんなるんだ?」という根本的な問題に気付く。

がばつと顔を上げて問いただそうとすると、すでに辻霧は別なところに電話をかけているようだった。何やら熱心に話し込みながら明日原に手招きで路地の外に出ようと言っている。警備員が来たら面倒だからだろうか。

四次元の棺に捕らわれたままの『追尾誘爆』を時折振り返りながら、明日原は辻霧に着いていった。会話が断片的に耳に届いてくる。

「だからさ……そこは聞かなくて良いって……うん、そう……ん？
ああ、今度面白いものを見せてやるから」
何の話だ。

大通りに出てから明日原は気になっていたことを尋ねた。

「アイツあのままにして出て行つて良かったの？ 三次元の物理法
則は通用しないって……」

通話を終えて携帯をポケットに収めながら辻霧は何でもなさそう
に答えた。

「ああ、それなら大丈夫。俺の力場が離れて二十分くらいしたら自
然に消滅するから。それまでには近場の警備員が到着してるだろ」
それより、と辻霧は前置きした。

「お前の処遇が決定した」
ドキリ、と。

明日原のこめかみに嫌な汗が流れる。

「……………」
重々しく、辻霧が口を開く。

「お前を来週から『一週間繚乱家政女学校調達のメイドコスプレで
俺の家事全般を押しつけられるの刑』に処す」

「……………」は？」

何か聞き間違ったのかもしれない。

「も、もう一回お願いします」

「え？ だから『一週間繚乱家政女学校調達のメイドコスプレで俺
の家事全般を押しつけられるの刑』だってば」

一言一句間違はなく完璧にリピートされた。
完全に訳が分からない。

「そ、でも、それ、ば」

「あー心配しなくてもいい。メイド服に関しては繚乱家政女学校のコネから確保済みだから」

論点が完璧にズレている気がする。というかそれ以前に見過ごし
ている問題が大量にあるような気がする。

「なん、いや、そん」

さつきから混乱のしつぱなしで拳動のおかしい明日原に対して辻霧は急に深刻そうな表情になった。

「ああ、そうか通勤費用が必要か……さすがに一週間自腹は昨今の学生のお財布事情には非情すぎる現実だしな……あ、なんだったら住み込みでも」

「なぶッ!?　ば、馬鹿ヤ口おおおおおオオオオオオ
っ!!!!!!!!!!!!」

明日原が吼えると同時に辻霧の身体は鮮血と共に夕焼けの空にか
つ飛んでいった。それはそれは見事なホームランだった。

終章 後日 Hope To Relation .

終章 後日 Hope To Relation .

「とりあえず一件落着、か」

七月十四日 p . m . 5 時 3 7 分、第七学区のとある大能力者が眠る病室。

彼女の従弟である逆浦透通は風紀委員本部の報告にほっと一息吐いた。 昨晚突然連続通り魔事件の犯人が確保されたという一報が入り、慌ただしく唐突な事件解決後の情報処理や書類の作成といった残業をこなしてから三時間程度しか寝ていなかった。

第七学区から出張って来ていたという通り魔はその日の内に同学区の警備員に身柄を引き渡されたらしい。

これで全ての事件が解決し、第十八学区にも平穏が訪れた、と大半の風紀委員や警備員が胸を撫で下ろした。

だが、逆浦には一つだけどうしても腑に落ちない部分がある。

（あの通り魔）

三日前に起きた大規模かつ組織的な銀行強盗。アレだけの重装備の上に人員を割き、リスクを負ったにしてはあまりに成功した際の代価が少ない。それに関し特に言及はされていなかったが、気になっていた逆浦はある一つの推測の下に後日自主的な捜査を行った。

（同日に何者かが再び第一八学区のデータベースに侵入していた）

その結果は、彼の推測とほぼ一致していた。前回の侵入で風紀委員の情報に対するセキュリティがより堅くなったであろう事を見越して、銀行強盗という囷に皆の目が向いている隙に侵入した

少し突飛な考えかもしれない。そうなると三日前の銀行強盗を首謀、もしくは誘発した者が別にいるという事になる。

しかし更に彼の不信感を高めたのはその侵入した痕跡だ。データベースをクラックした時刻は七月十一日 p.m. 6時48分。そして事情聴取の記録を見る限り、その時刻に通り魔はまだ学区間を行き来するリニアモーターラインの車内にいた。その際ネットワークに接続できるような端末やデバイスは所持していない。つまり彼が『分身能力者』バイロケーターでもない限りは同時刻にクラッキングは不可能である。

もしも。

もし、そういった情報をクラックし、第三者に提供している人物が通り魔とは別にいたとしたら？

あくまで可能性の話だ。だが彼にはどうしてもそれが真実に思えてならない。

常に学生による少年犯罪の第一線に身を置かなければならない風紀委員である以上、いずれは彼もその学園に潜む暗部と闘わなければならない日が来るのかもしれない。

しかし、とりあえず今だけは。

今だけは、ようやく戻ってきた平穏を過ごしたいと、逆浦は切に願った。

「彼女、回復はどうやら順調のようだね？ この分だと今週中には意識が戻るかもしれないよ？」

何より、今日病院を訪れたときに玄関で今し方自分が担当した患者を見送ったらしきカエル顔の医者が自分にかけてくれた言葉だけでも十分な救いになった。

穏やかな表情で眠る従姉の顔を眺めながら、逆浦はあの色の薄い高校生のことを思い出していた。

あの日、病室から立ち去る間際に彼は突然「通り魔事件のデータをプリントアウトしてもらえないか」と尋ねてきたのだ。不用意な情報開示は風紀委員としてもあまり賢明な行動とはいえなかったのだろうが、あの時は逆浦もなぜそんなものが必要なのだろうかと訝ったものの、鏡大路を助けてくれた恩もあるだろうからとその場で

渡したのだつた。

そしてそれから約四時間後に通り魔事件は急転直下の解決を迎えることになる。

(安直すぎる考えかもしれないけど)

否が応にもこの二つの出来事の間にはんやりとした繋がりを見て
しまふ逆浦だった。

終章 後日 Hope To Relation・(後書き)

．．．．．と。これで一応完結です

最後まで読んで下さった方はありがとうございました

さりげに続きを暗示させるような終わり方ですが続編も視野に入れて書いてみたいで、手元に中途半端なところまで書き上げた続編が一応あります。魔術サイド絡んできます

コレに関しては本作の反応の方を見て続きを書いて投稿するかどうかを決めたいな．．．と

こんな作品でも感想質問批判等くださったら大変嬉しく思います
願わくは本作のキャラ達が読者の方々の印象に残ればなあ．．．
か思ったり；

それでは（．．．）ノシ

設定

つじぎりひとえ
辻霧単

> i 1 0 2 1 1 — 1 4 6 7 <

本作主人公。第七学区鶴来浦つるきうら高等学校二年。

細い華奢なシルエットにぼさつとした頭が特徴。全体的に色素の薄い体をしている。

面倒臭がりで大抵のことには興味を示さないドライな性格。人付き合いが苦手で身近な人がトラブルに巻き込まれてもまず自分から動くことはない。日常を「自分自身をより大衆に埋没させるために必要なルーチンワーク」としてとらえており、人間関係も極力付かず離れずといったものを構築しようとしている。

実はその気になれば第八位のレベル5になれるほどの能力を秘めているが、本人が向上に対して前向きな姿勢を持たないため能力開発は停滞。滅多に人に能力を見せることもない。

能力は『幻影燈機』オーバーデイメンション システムスキャン。身体検査による判定はレベル4。次元の透過率を操作し、「幻影」を三次元上に投影する能力。簡単に例えるなら物体に通常存在しないはずの別の角度からの照明を当て、本来とは違ったもう一つの影を生み出すようなもの。「幻影」はあくまで多次元上の物体の影なので、三次元上の物体はこれに干渉できない。

また辻霧が「自分だけの現実」パーソナルリアリティによって掌握できているのは二〜四次元までであり、それ以上の多次元空間への干渉は能力の暴走、ひいては辻霧本人の脳のキャパシティを越えパンクさせてしまう恐れがあり、辻霧がレベル4止まりであるのはこれに起因しているとも言える。

メイド萌え疑惑がある。繚乱家政女学校にコネがあるなど、謎な面が多い。

あすはら さとみえ
明日原早苗

> i 1 0 2 1 2 — 1 4 6 7 <

お節介な性格の鶴来浦高等学校在籍の女学生。レベル2の異能力者。ソフトボール部所属。

行動理念の根底に強力な好奇心があり、あらゆる物事に対して研究熱心である。対照的に自分自身のことに関してはあまり興味がならしい。

とある出来事から偶然辻霧の能力を知ってしまい、当然ながら興味を示す。彼の「自分だけの現実」が四次元までしか対応できないことを知った上で、彼に十次元の理論構築について教えようとしてつくく付き纏う。

能力は『強制移動』^{アポリーション}。十次元上の自身の絶対座標を基点として物体を自身の元へと瞬間移動させる能力。

他の瞬間移動能力者に違わず十次元上の論理を応用した能力だが、未だに自分自身の座標を基点としなければ能力を扱えないためレベル2止まり。身体検査では毎回「^{エクスペクトブル}発展途上」と評される。

『追尾誘爆事件』で辻霧に借りができ、あることを命じられてしまつ。

さかづき すきいお
逆浦透通

第一八学区手親女中等教育学園の学生。レベル1の『^{ジャミングヘルツ}妨害聴覚』^{ジャッジメント}で風紀委員。気弱そうな外見で、歳の割に童顔な為かよく女子に間違えられる。

強い意志を持つ大能力者である従姉の鏡大路に憧れを抱いており、脆弱な自分のことを卑下する傾向が強い。

かがみ おおし まきな
鏡大路時奈

> i 1 0 2 1 3 — 1 4 6 7 <

逆浦の従姉。常盤台中学の三年生にしてレベル4の大能力者。辻霧の能力を知る数少ない人間の一人。

ポニーテールの似合うクールビューティー。冷然とした外見に加え、男勝りな言動が目立つ一匹狼な性格。学校ではどの派閥にも属さず大抵は独りで行動している。

全体的に上記のような威圧感に満ちた印象を周囲に与えている傾向があるが根は優しい。逆浦を実の弟のように思っており、彼に対しては本人の自覚以上に甲斐甲斐しく豆に世話を焼いている。意外に寂しがり屋な一面も。

能力は『アソンリユートゼロ通行止め』。触れた物体の質量、体積に関わらずその運動状態を「静止」にする事ができる能力。音速を超える速度で発射された弾頭ミサイルを片手で受け止めたり摂氏三千度の鉄塊の気体分子の運動を静止させて氷漬けにしたりなど、能力の汎用性は高い。

バックファイア 追尾誘爆

第一八学区連続通り魔事件の犯人。

能力はレベル3の『追尾誘爆』。相手のAIM拡散力場に干渉して能力を膨張、暴走し、自爆させることができる。

自分の能力で次々と高位能力者を襲撃、自爆させていた。

第一章 八月十五日 Diamond Cutter Level 3 .

第一章 八月十五日 Diamond Cutter Level 3 .

路地の中程で奇立たしげに舌打ちすると、あらかわははき新河幅揮はぼそりと呟いた。

「チツ土御門つちみかどの野郎、なーにが『健闘を祈るにやー』だあのエセ高知人め。結局まともな情報はほとんどねーだろうがクソツタレ。よほど一遍細切れにして欲しいと見える」

その言葉は目の前にいる青年に対してというより、どちらかといえば独り言に近いニュアンスだった。

青年は この現代科学を軽々と超越したちよつとした近未来SF世界である学園都市に、おおよそ全く似つかわしくない格好をしていた。180センチを越える長身に薄茶色に染めた雑草のように無造作なヘアスタイル。ゴシックなデザインのシルバークラスが片耳に幾つも余分な穴を空けている。左目の下に涙のモチーフなのか、青色の滴の形をした刺青が入っていた。近代ヨーロッパを思わせるチェック柄のシックなマントに、止めとばかりにベルトの左側には装飾的な意匠のショートソードがぶら下がっていた。その辺りを歩いているだけで職務質問を受けそうだった。

青年は新河の独り言を聞いて意味を理解したのか、気遣わしげに声をかけた。

「内憂外患激しいところ悪いが、土御門元春を知っているのか」

「ああ？ そういうお前はどうかんだヨ」

「……………それを知るも知らぬも貴様にとっては大同小異であろう」
「気に入らねーなあオマエ。大方潜入前にイギリス清教に関しては

大ざっぱに下調べ付けといたんだろオが」

敵意を隠そうともせず、青年を睨め付ける新河に対し、青年はあくまで自然体を貫き通していた。

「事実無根、だな。まあそのような枝葉末節な物事は捨て置け。土御門の仲間とするなら貴様、アレイスターの犬か」

「一々物言いが気に食わねえんだテメーはヨ。それに犬なんて大したもんじゃねーし」

新河は自嘲気味に言い切った。

「良くてネズミが精々だろ。大衆的にはスパイって方がウケが良いみたいだが」

「蛇足かもしれんが言葉の取捨選択は大事だぞ。まあ貴様のそれもまた一興だが」

「ハア……ぐちゃぐちゃした能書きはそろそろいい加減にしてさつさとやらせろつつのヴァーダント^{……}ブレイドアクト」

青年 ヴァーダントは意外そうに眉をひそめた。

「ほう、油断大敵、だな。そこまで早く情報が回っているとは……まあ些末な問題に過ぎないか」

「言葉の取捨選択すべきなのはどっちだっつー話だヨ。『不言実行』つつー言葉を知らねーのか」

「その引用、間違ってるぞ」

「フアック」

特に興味も無さそうに言うと、新河は着ていたシャツの袖を二の腕まで捲り上げた。生白い腕が露わになると同時に、準備運動のように右手の指をパキッと鳴らしてみせる。

その右腕を無造作に手近なコンクリートの電信柱に叩きつけた。

ゴッ！！ という轟音と共に、電信柱は爪楊枝のように簡単に折れて砕けた。

ヴァーダントは折れた電信柱が自分の真横に倒れ込んでもぴくりとも動かなかつた。冷静にその場を観察している。

この破壊力こそが新河を強能力者^{レベル3}たらしめる能力、『^{ダイヤモンドカッター}極限研磨』。要は物体にかかる圧力をその面積や仕事量、重力加速度を無視して自在に操ることができる能力。その応用によってはダイヤモンドさえ切断可能な鋭さを手に入れることが可能だという。

「……………魔術師が無理に能力開発を行うと肉体に必要な以上の負荷がかかると聞き及んでいるが」

「御心配どーオも。オレは土御門と違ってハナっから科学サイド^{こうち側}の人間だからナ。魔術なんて裏ワザの類は二、三八ナシに聞き及んだ程度の知識しかねーヨ」

首をコキツと鳴らしながら気怠げにそう言った新河は次の瞬間、ダンッ！！と地を蹴り、一息でヴァーダントの懷に飛び込んだ。「で？ テメーの心配はどーしたヨ」

引き裂くような笑みと共に小指から肘までのラインに圧力を集中、分厚いタングステンの塊さえも易々とセロファンのように切り裂く鋭さを得た左腕が咄嗟に構えられたショートソードごと青年を寸断する。その、直前だった。

唐突に眼前のショートソードから異様な威圧感を直感的に感じ取った新河は、圧力を踏み出した右足の踵に集中させ、即席のスパイクで慣性を強引に抑え込んでザジジッ！！と無理矢理後方に跳んだ。アスファルトに彼女の跳んだ軌跡を追うように一直線の溝が抉り取られる。

着地した新河が訝しげに自分の左腕を見ると、丁度手首より数センチ下の位置に横一文字の傷があった。いつの間に、いや、そもそもどうやって斬られたのか。

「奇怪千万、といった表情だな」

極限まで研ぎ澄まされた圧力の鎧を破り、一太刀でそれを傷つけた男は、つまらなそうに呟いた。

「ふん、こんなものか。上半身を両断するつもりだったんだが。まあ丁度そちらから手を出してきたところだし……」

ゆつくりと、ヴァーダントは右手に構えた刃も切っ先もない奇妙な形の装飾的なショートソードを新河に突きつけ、不適な笑みを浮かべた。

「正当防衛、だろう？ 今一度己に誇りの意味を問おう Superbia 912 という名を覚えておけ。冥土の土産というやつだ」

「ほざけ。カッコー台詞の途中悪いがくたばんのはテーマだボケ」ボキボキッと『極限研磨』の調子確かめるように腕を鳴らす新河。そのまま一気に身を落とすと、再びキュガッ！！と地を蹴る。今度はスパイクを利用した稲妻の形のような変則的な軌跡と共に、高速の両腕がヴァーダントの腰の位置を執念深い猛禽類のように狙った。

それをマントを翻し、軽くないしつつヴァーダントは言う。

「現実問題、カーテナ」オリジナルを手取る意志が女王に無い以上、イギリスの国際的地位はこの先も確実に蔑ろにされていくだろう。ならば微力だとしても我々には『アレ』が必要なのだよ」

「言葉の………取捨………選択は………どオしたああアアアアッ！！！！」

どれだけ速く動いても、

「ならばアレイスター個人の野望と国一つ………比べるまでもない。どちらにしろ彼がダメ元で適当に立てた計画の残骸だ」

どれだけこの両手が鋭くても、

「ヤツが浅ましく喰い散らかした残飯を漁るようで虫酸が走るがな………だが臥薪嘗胆もまた一興。貴様程度の障害………苦戦しているようでは国に面目が立たんのだよ」

追いつけない。

ヴァーダントは受け太刀すらしなかった。新河を上回るスピードと身体速度で彼女の斬撃を躲し、あの妙なショートソードで確実に反撃する。戦闘のあまりの速さに二人の動きを追うように血風が飛

んだ。

「胆大心小すべきはこの剣のみと思われていたようで誠に心外だな。オリジナルの一割の力さえ持たないというのに」

「何の……ハナシだ……」

ドパンツ！！とコンクリートを粉碎し、一旦互いに距離を取った二人の姿はまるで正反対だった。マントに汚れさえ付いておらず悠然と直立するヴァーダントに対し、新河は両腕の細かい切り傷から血を流し、荒い息と共に腰を屈めて何とか立っている状態だ。

「カーテナ、という英国の宝剣にはな、次元を切断するという面白い術式が組み込まれている。私の手元にある、このカーテナレプリカはその術式構成に必要な装飾、魔術的な記号を九分九厘再現したものだ」

青年はその身長に対して不自然なほど短いショートソードの刀身の側面を、すつと指の腹で撫でた。

「だが所詮はレプリカ。オリジナルが遠く及ばぬ贋作に与えた力はいくまで『次元を切断するだけ』に止まった　まあ単

純明快に言い表すなら『何でも斬れる剣』と言ったところか」

そう、彼が行っているのは『何でも斬る』という、ただそれだけだがそれだけが科学サイドと魔術サイドの境目に触れるスパイとして特殊な訓練を積んできた新河を圧倒するファクターとはなり得ない。

「私は元英国騎士団所属でね」

新河が痛みとダメージに耐えかねて片膝を付くのを見ながら、魔術師はのんびりと過去を語る。

「点滴穿石を覚えなかったんだろうね。十歳の時入団して二年で『必要悪の教会』に逃げ込んだ。従騎士にすらなる前だ。故に中途半端に騎士団の術式とイギリス清教の魔術を扱える。君は例えば私に敗北し、片膝を付いたとしても何も恥じることはないのだよ……君は敗北すべくして敗北したのだから」

最早新河には言い返す気力もない。血塗れの腕を地面に付きなが

らも、凶悪な表情で元騎士に問うた。

「よお……クソツタレ……何なんだよテーマの目的は」

ヴァーダントは僅かに不快そうな表情でそれに応じた。

「……問われたことに対して卑怯な返答を寄越すことを許せ。これから答えることはそのプロセスに過ぎない」

そしてヴァーダントは、一言だけこう答えた。

「『原石』だよ」

一応上げてみました。第二話です。

正直イギリス清教とか騎士団に関しては知識が．．曖昧でして．．
．．．色々と間違っているかもしれませんが大目に見て下さい；
シリーズにおいて科学と魔術が初めて交差する第二話、最後までお
付き合い頂けると嬉しいです。

第二章 八月十六日 After/Before | The Trouble .

第二章 八月十六日 After/Before | The Trouble .

めんどくさいことになったな、と辻霧単はぼんやりと感じていた。
すっかり夏休みムードに突入した学園都市は、虚空爆破事件だと
か原因不明の大停電だとか廃ビル倒壊事故だとかまあ相変わらず色
々と物騒ではあったものの本日は実に平和で、雲一つ無い晴天の下、
宿題のことを頭から追い出した学生達で賑わっていた。

第一八学区を恐慌に陥れた追尾誘爆事件から一ヶ月。喉元過ぎれ
ば何とやらというが、過ぎるスピードが常人離れしているのだとし
か思えない明日原早苗^{あすはら さなえ}は、キザっぽい赤いフレームの眼鏡をくいつ
と押し上げると教卓越しに振り返った。

「……つまりはp軸における座標 $x(a_1, b_1, c_1, \dots, n_1, o_1, p_1)$ と $y(a_2, b_2, c_2, \dots, n_2, o_2, p_2)$ 間
において三次元上の空間という概念が限りなくゼロに近いという定
理に関しては、先程説明した『^{マキシマムライト}直角の極限值』の表で証明した通り
であります分かりましたか辻霧くん！」

欠伸が出た。

本日の明日原は年中ジャージで通っている彼女にしては珍しく半
袖のブラウスに学校指定の紺色のプリーツスカートを穿いている。
辻霧は何となく明日原のニーハイソックスとスカートの裾の間から
僅かに覗いている生白い足に視線をやりながら、

「そういえばお前眼鏡なんかかけてたっけ？」

「ダ・テ・よ」

明日原はそう言うつと腰に手を当てて再び眼鏡のブリッジを中指と

薬指でくいつと押し上げた。気に入ってる動作のようだが普段のバ
イオレンスな彼女をある程度見知っている辻霧にしてみれば「似合
っている」という感想を言うには若干良心が痛むというのが正直な
ところだった。

「その様子だとまた聞いてなかったみたいね……どこから？」

「えーと『ハイまず好きなところ座って』とか何とか言ってたよう
な覚えがあるな」

「それって教室入ったところからだろーが」

そうは言われても時刻はすでにp・m・1時20分をまわってい
る。エアコンがガンガン効いている空き教室で耳の中を右から左へ
抜けていく明日原の講義に比べれば、扇風機一台常備の寮の自室で
聞こえてくるアブラゼミの鳴き声の方が余程意味を為している気が
する。

「アンタの寮ってエアコン無かったっけ？」

「あるけど電気代が勿体ないーの」

ひんやりとした机の上に頬を押しつけながら辻霧がぼやくと、明
日原は溜息を吐いた。

何がどうしてこの状況に到ったのかというと原因は一ヶ月前の事
件に遡る。第一八学区内で多発した能力者による通り魔事件に（主
に明日原のせいで）巻き込まれた辻霧は（不本意ながら）一連の事
件の犯人を流れて叩きのめしてしまい、それによってこの口やかま
しいお節介な少女に今まで隠していた能力をバラす羽目になってし
まったのである。口止めのために一週間の「罰ゲーム」を与えたま
では良かったものの、罰ゲーム後「誰かにバラさなければ良いわけ
であってこれ以上関わらないとは一言も言っていない」という理屈だ
か屁理屈だか分からない論法に圧され、こうして「レベル5になっ
たアンタの能力を見てみたい」とかいう非常に個人的な理由で恒常
的にお節介な能力開発の講義を受けさせられているのだった。

もういっそ「罰ゲーム」中に撮った写真でも流出させてやろうか
とブラフばりに脅しをちらつかせたこともあったが、「アンタがひ

なくてんのは分かってるけど嘘は吐かないって事も充分分かってるから」とキシリトール10%入りくらいの爽やかな笑顔でそう返された。そこまで良心に訴えかけてくるといくら辻霧と言えども流石に何も言えない。

眼鏡を外し、胸ポケットにしまいながら明日原は言う。

「別に損してるわけじゃないんだから良いでしょ。丁度次の試験の範囲とも被っててしかも能力開発も向上するってんだから一石二鳥じゃない」

「なーにが一石二鳥だよ。前も言ったけど俺はこの上を目指す気は毛頭無いの。別に落ちなきゃ良いんだから何でこの上をわざわざ目指さなきゃならんわけ？」

「それ抜きに考えてもアンタの成績が悪いのは事実じゃないの」
ぐ、と辻霧は言葉に詰まった。

確かにここ最近の辻霧の試験の成績はぱつとしない。特に記録術かいほうは本人のレベルが高いにも関わらず前向きな姿勢が見られないために停滞しているという状況である。

視線を縦横無尽に駆け回らせながら辻霧はろれつの回らない舌で、「べ、べべべ別に良いんだよ。そ、その、アレ、他の教科でカバーするし」

「はあ……前期期末考査十三教科合計順位240人中231位の方が何を仰いますやら」

「はあああああッ!? お前何でそんなこと知ってんだよ!？」

「部屋掃除まで人に押しつけたのはアンタでしょ。床にくしゃくしゃに丸まってるから何だろうなーと思ったら……ねえ」

「『ねえ』じゃねーよ! あっ、お前それどこにやつ……」

「ぴら〜ん」

「おおああああああアアアアッ!!!!!!!!!!」

明日原が胸ポケットから取り出してかざして見せたそれは、紛れもなく以前始末したはずの辻霧の前期成績表だった。

「おま、なん、それ」

「と、ゆーことで。アンタがやる気出さないんなら明日原さんもちよーっと考えるとところが無くもないかなーという感じで」

暴挙だ。

あまりの出来事に辻霧が絶句していると、明日原は腕時計を確認しながら、

「まー若干ぐだつてきたし、時間も時間だから今日はこの辺でお開きね……教室でやれば良いってもんでもないみたい」

形から入るのも考え物ねーなどとぶつぶつ良いながら帰り支度をし、「それじゃ」と軽く手を振って明日原が教室を出ようとする瞬間を辻霧は見逃さなかった。

「ほああああアアアアアッ！！！！！！」

魂の絶叫と共に飛び出す辻霧。何かと明日原が振り返ろうとするも、辻霧の視界には入らない。彼の視線は目指す一点

明日原のブラウスの胸ポケットから飛び出ている自分の成績表にしか向いていなかった。

出来るか？ 出来る。やってみせる。人間火事場の何とやらとは言ったもので、辻霧の伸ばした手は針穴を突くかの如き精度で成績表に向かっていた。

ただ一つ。

ただ一つ、彼に誤算があったとすれば、それはあまりの集中力に周りが見えていなかったことだろう。

辻霧は猛然と机の脚に足を取られて前のめりにすっ転んだ。

そして、伸ばした彼の手は勢い余って別のものを鷲掴みにしていた。

「……………」

恐る恐る辻霧が顔を上げてみると、信じたくなかった最悪の光景があった。視覚情報に裏付けられるより先に触覚がその柔らかさを伝えていたにも関わらず。

もの凄く嫌な空気が一瞬にして二人の間で爆発的に膨張した。

ああ、えっと、その、何だ。こついう時なんて言えば良いんだっけ？

よつやつと引きつった表情で辻霧は感想を述べた。

「……け、結構でかいんですね」

笑顔のまま、明日原の左手が金属バットに伸びた。

「……やり過ぎた」

「……」

「……ごめんって」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……ハ」

「え？」

「……ハンバーガー奢って」

「……えー……」

「……いいか？ お前、窃盗罪でも成立すりや懲役五十年か五百万円以下の罰金だろ。万引きすら年十万円のところをハンバーガー一個で殺人未遂チャラにしてやろうとしてんだから大特価じゃねーか」
拳大の瘤を押さえながら若干涙目で辻霧は屁理屈を吐いた。

金属バットという単価約五千円で手に入るお手軽鈍器による殺人ショーに今回ばかりは明日原も少し反省しているのか、「じゃあちよつと待ってて」と大人しく最寄りのハンバーガーショップに走っていった。

呻き声を上げながら駅近くのベンチに辻霧は仰向けに寝転がった。

「ちつくしよ……バカバカ殴りやがって……」

家庭科室の冷凍室から拝借してきた即席の氷嚢を額の上に乘せながら辻霧がブツクサ言っていると、不意に日光が遮られた。

「……………」

「邪魔だ」

聞き覚えのある声に顔を上げると、鏡大路かがみおおじ まきな薪奈だった。相変わらずのポニーテールとお嬢様中学校を示す常盤台の制服で、買ったばかりの靴の裏に張り付いたガムを発見したときのような表情で辻霧を見下ろしている。

「あらーお久しぶりー」

「……………邪魔だと言ったのが聞こえんのか」

この炎天下で周りの空気が昇華しないのが不思議なくらい冷然とした声で再び促されて、辻霧も渋々身を起こした。

「いやー冷たいなー鏡大路さんは。この氷嚢のように冷たい」

「氷漬けにしてやるのか？」

「……………結構です」

奇遇にも鏡大路は今し方明日原が走っていったハンバーガーショップから出てきたところだったらしく、辻霧の隣にちよこんと腰掛けると持っていた紙袋からハンバーガーを取り出してむぐむぐやり始めた。その光景に妙な既視感を感じる一方、お嬢様でも昼食にこんなジャンクフード食うんだなあと思折した親近感と薄っぺらい感動を覚える辻霧だった。

通り向かいのハンバーガーショップの方に目を向けるとどうやら混みあっているようで、鏡大路がわざわざ通りを横断してこっち側のベンチまで来たのも全席が埋まっているからだと分かった。こりや明日原時間かかりそうだなーとか思考しつつも何気なくウィンドウに視線をやると、デカデカと『ダブルチーズ、フィレオフィッシュ、ポテト半額！』と貼り紙がしてある。混雑の元凶に辻霧は納得したが、ふと鏡大路の買ってきたメニューがモロにダブルチーズとフィレオフィッシュとポテトのSサイズであることに気付き、あの普段の一匹狼な鏡大路が「半額」という言葉に釣られて長時間列に並んでいたのだろうかと思像して思わず吹き出しそうになった。

「何だ？ 何か言いたそうな顔だな」

笑いを堪えようとする辻霧の表情の微細な変化を見咎めた鏡大路はダブルチーズバーガーを咀嚼しながらじろりと彼の顔を睨みつけた。

「ん？ 別に。それよりお前、それ食べ切れるのか？」

「……………」

育ち盛りの男子高校生にとってはおやつのような分量でも、昼食にハンバーガー二つというのは女子中学生にはちよつとばかり重いメニューである。

表情にこそ出さないものの辻霧に指摘されてから初めて気付いたらしく、明らかに鏡大路は失念していた、という様子で手に持っているダブルチーズと紙袋の中のフィレオフィッシュを見比べていた。やっぱりこいつは変なところ律儀なくせに妙に抜けている。

数秒間逡巡した後、鏡大路は紙袋の中からフィレオフィッシュの包みを取り出すと辻霧に無造作に放って寄越した。

「やる」

「お代は？」

「……………」 たかがハンバーガー一つにこだわるほど人間は小さくないと自負しているが」

「あ、そう。んじやいたたくわ」

明日原が戻ってくる前の前菜か、等とどうでもいいことを考えながら辻霧がばくついていると、一足先にダブルチーズを食べ終えていた鏡大路がそっぽを向いてぼそぼそ話し始めた。

「……………」 その、一ヶ月前は、醜態を晒したな」

「ふま？」

突然何の話だろうと辻霧は訝ったが、鏡大路は構わず続ける。

「お前が通報したと透通すきとおに後で聞いた。……………」 手間をかけさせたよ
うで悪かった」

「……………」

「とりあえずそれで貸し借りは無しだ。いいな」

鏡大路はそれだけ言つと、紙袋を鞆にしまつて一度も振り向かず

に立ち去って行ってしまった。

辻霧が今のが鏡大路なりの精一杯の「ありがとう」だったのだと気付くのに彼女が立ち去ってから暫く時間を要した。

フィレオフィッシュの最期の一欠片を咀嚼し、嚥下すると、辻霧は呆れたようにして溜息を吐いた。

「……………お前の命ってハンバーガー一個分なのだよ」

帰宅すると既に三時を過ぎていた。

「ん……………」

三階の自室のドアの前で学生鞆を引つ掻き回し、自室の鍵を引つ張り出してから辻霧は妙なことに気付いた。

ドアに鍵が掛かっていなかったのだ。

（あらー……今朝は確かに閉めてった筈なんだが）

とすると原因は必然的に一つくらいしか思いつかない。

（……………空き巣、か）

この時辻霧が真っ先に考えたのは、「別段盗られて困るようなものなんてねーし通報すんのもめんどくさいから別にいーや」ということだった。

だが流石の辻霧も部屋に入ってすぐのダイニングに置かれた卓袱台の上で侵入者がすやすやと寝息を立てていることまでは予想が付かなかったようだ。

「は……………」

１LDKの間取りに生活に必要な最低限の家具が雑然と置かれているだけの殺風景ないつもの部屋に、明らかに非日常の異物が混入していた。

風変わりな出で立ちの少女だった。小柄な体格を夏場に嫌と言うほど似合わない黒い長袖のたるつとしたハイネックが覆っている。そのせいか少女の白金色の滝のように卓袱台から流れ落ちる長髪が、金を通り越して白っぽく見えた。それに輪をかけて目を引いたのは

彼女の顔だった。陶人形のように白く整った顔立ちだが、左目の周りに刺青なのかメイクなのか、紫色の蜘蛛の巣に群青色のアゲハチヨウがかかっている意匠が施されている。それが戦慄するような魔術的な印象を辻霧に与えていた。

辻霧が帰宅した際の物音で目を覚ましたのか、華奢な不法侵入者はゆっくりと身を起こすと真っ直ぐに射抜くような視線で辻霧の方を見た。

「けだし」

どろっとした糖蜜が零れ落ちるような倦怠感を否が応にも感じさせる、そんな

声が唐突に辻霧の耳に飛び込んできた。

絶句して棒立ちになっている辻霧に向かって、少女は言った。

「腹が減ったぞ、辻霧単」

第二章 八月十六日 After/Before The Trouble .

原作既読者の方は当然わかると思いますが、邂逅シーンは見たまま
まアレのオマーージュです。

御意見御感想御批判等々々いつもの如くお待ちしておりますのでよろ
しくお願いしますです

第三章 八月十六日 Black Box Unknown .

第三章 八月十六日 Black Box Unknown .

「君という主観からして観測という事象がなければ僕は存在していないに等しかったことになる。僕の主観にとっても同じく。ならばこの邂逅はある意味で両者の存在を確立させる上で必然性を伴ったものであると言い換えることが出来る。……では言葉を代えようか。例えば君がたった今、そのアルミ製のドアノブに手をかけ、回し、ドアを開けて玄關に立ち入って僕の視界に入ってくるまで、君が存在していなかったわけではあるまい。あるいは同じ前提条件の上で、君が僕が存在するという事実を認識するまで僕は存在していなかった、というわけでもないだろう。だがね。それらは互いに自我というものを持っていると仮定した場合にのみ成立し得るものだ。ましてや『観測』という事象そのものが観測対象に対して影響を及ぼしていないという証明など誰も出ていないのだからね」

かれこれ三十分程度この調子だが、辻霧は本日にして初めて試験対策の明日原の講義よりも不法侵入を敢行した挙げ句他人様の家の卓袱台に寝転がって延々と哲学的な説教を垂れる少女に対する応対マニュアルの方が役に立つであろうことを学んだ。

辻霧が体育座りで忘我の彼方へと自分自身を飛ばす遊戲に興じていると、どういった経緯で結論に到ったのかは不明だが、取り敢えず満足するまで話し終えた少女がごろんと立ち上がった。

「けだし、話がまどろっこしくなってしまうといかんな。なに、ちよつとした確認だ辻霧単」

そこで初めて辻霧はこの国籍不明の不法侵入者に口を開いた。

「……………あのさ、俺が忘れてるだけなんだったら悪いけどさつきからやけに馴れ馴れしいが誰なんだお前」

辻霧の予想していたおおよそのリアクションを裏切って少女は意外そうに眉をひそめた。

「おや、僕としては君の隣人として接してきたつもりだったのだが辻霧単」

「隣人……………」

「君の部屋を出て左隣の部屋の住人だ。及萩曆おいはぎよみ。まさか認知すらされてなかったとは……………すまない。けだし、僕の不備だったよ辻霧単」

「ちょ、待て待て」

ここは男子寮である。

（いやそんなまさかな……………？）

自ずと辻霧の視線が曆の下半身の方に行つたのも無理からぬ事であり、彼が責められる謂われは微塵もない（筈である）。

「いや案ずるな辻霧単。けだし間違いなく僕の身体を構成する細胞にY染色体は含まれていないから」

「おおそーかそーかそれは良かった……………じゃねえよ尚更根本的におかしいだろーが」

辻霧は体育座りから足を崩して胡座をかくとがしがしと頭を掻いた。

「いいかお前、ここは男子寮なわけだ。健全な。女子禁制。お分かり？」

「ん」

「んじゃ何でお前はここに住んでるのかっつー話になるわけだが」

「なぜ住んで……………と問われたところで納得のいく回答を導き出せるとは思わないな、けだし」

「んじゃ納得させなくて良いから合理的に説明してみろ」

「ああ……………」

曆は辻霧に背中を向けたまま暫くぼんやりと宙を見つめていたが、

やがて言った。

「

誰にも観測されていなかったからだろ

う、けだし」

「オーケー、寮監に連絡だ」

即座に辻霧は立ち上がったが直後、あろうことが暦は卓袱台を踏み台に辻霧の頭に跳び蹴りを食らわせた。

「けばぶッ――！」

「まあ待て、早まるな辻霧単」

無様な格好でうつ伏せに倒れている辻霧に丁度馬乗りになっている形で暦は平然とそんな言葉を吐いた。

「…………『早まるな』じゃねーよ人んちにずかずか不法侵入して延々意味不明の説教垂れやがって挙げ句がコレだ。もうお前ヤダ――！
国に帰れ――！」

「帰れと言われても君の家の左隣に帰るだけなんだがな……………それより騒ぐ前に君、一番聞きたいことを聞きそびれてないだろうか」
「んなこた今どーでもいいだろうが警備員呼ぶぞクソガキ」

「僕がなぜ君の部屋へ不法侵入を敢行したか」

その言葉を聞いて、暦の黒いニーソックスの下で暴れていた辻霧はぴたりと動きを止めた。

「そんな意味深な言い方するって事は余程のことなんだろうなじやなきや俺はキレますよお嬢さん」

「……………既にキレているように見えることに關してはさておき」
きつちりツツコミという前置きをしてから暦は真顔でこんなことを言い放った。

「僕は……この世界の人間ではない」

十二分後、卓袱台の上には炊飯器と醤油瓶、茶碗一膳と「はながつお（お得用3ダースパック）」に湯飲みと魔法瓶が並んでいた。辻霧と暦は丁度向かい合うようにして座布団に正座している。

おもむろに辻霧は厳粛とさえ言える表情で炊飯器の蓋を開け茶碗によそうと、かつおのパックを一袋慣れた手つきで開封し、丁度よそった白米が鯉節に覆われるくらいの量を目分量で正確に投入し、醤油を適量円を描くようにかけた。暦の側に置いてあった箸で素早くそれを七回半まんべんなくかき混ぜると、ごとりとそれを箸と共に暦の前に置く（この間およそ十七秒）。

「食べなさい」

熟練の職人の顔で辻霧がそう薦めると暦はおずおずと慣れない動作で箸を握り、かき込み始めた。

即座に辻霧は魔法瓶から沸かしておいた煎茶を湯飲みに汲むと、それを静かに暦の前に置いた。

「飲みなさい」

すかさず暦が湯飲みを掴んでご飯を流し込むようにするのを辻霧は重々しい表情で見ている。

そんなこんなで十五分程の食事が終わると、暦は頬にいくつか米粒をくつつけたまま、かふーっと満足したように一息吐いた。

「御馳走様でした」

「そうか、じゃあ行こうか」

「あい」

満腹感で高揚している暦を連行し、そのまま玄関まで向かった、が。

「ちえーすとオッ！！」

不意に正気に戻った暦の小さくも強力な膝蹴りが丁度辻霧の股間の辺りでズドンッ！！と炸裂した。

「あはん」だか「ほひん」だか、とにかく何か変な呻き声を漏らしてそのまま辻霧は玄関に今度は仰向けにぶっ倒れた。

今度ばかりは暦も手加減しなかったのか、実行犯本人もせえぜえ息を荒げている。

「君はなあ辻霧………！ 人の話を何を聞いていたんだ君は………けだし流石の僕でも堪忍袋の尾がブチンだぞ辻霧………！！！」

「なああああにがブチンじゃワレ『僕はこの世界の人間ではない』だあ！？ そんな思春期に若気の至りで公言しちやいました的なイタタな作り話で不法侵入を正当化してんなや！！ 立派な犯罪やぞジャりん子オ！！！」

金的蹴りが何らかのボーダーラインだったらしき辻霧もなぜか関西弁でらしくなく怒鳴り声をあげる。

散々筆舌に尽くしがたい舌戦を繰り広げた後、「ぐぎゃあ！」と叫んで取り敢えず二人は休戦に入った。

互いに部屋の端と端の隅っこでじめじめした視線を交わし合い、ぶりぶりしていると、辻霧の部屋のインターホンが鳴った。

暦が餌の臭いを嗅ぎつけた猫のようにすいっと顔を上げた。

「お客か」

「いいかお前、絶対顔出すなよ。色々と話がこじれるから」

若干落ち着きを取り戻しつつある辻霧はそう釘を刺すと玄関に向かった。こんな年端もいかない赤の他人の少女を部屋に連れ込めるなどと外部に知れたら社会的致命傷を受けるのは目に見えている。ドア越しに外を確認すると明日原だった。

「なーしたお前こんな時間に………」

「ああ、なんか幅揮が昨日スキルアウトとやり合っただかつていつて大怪我して入院しちゃってね、ちよっとお見舞いに行ってたんだ」

「あーあのヘヴィメタ天使………」

「？」

「いや、何でもない………で、何の用だ？」

「そうそう、これ渡しに来たの」

そう言っただけで明日原が差し出したのはクシャクシャの紙切れ

辻霧の成績表だった。

「え？ お前これ……」

「いやっあのね、その……今日はちょっと明日原さん意地悪しちやったかなーと思って」

拍子抜けしてまじまじと明日原を見つめる辻霧に対し、明日原はちよつと決まり悪そうに頬を赤らめ、視線を逸らした。

（つかいきなり改まって持ってこられてもなー……）

何だか互いに気まずい空気を感じる中、結局先に手を出したのは辻霧だった。

「ああ、そう。じゃあ一応受け取っとくわ、それ……」

「何だ明日原、君か」

不意に肩の辺りの高さから現在最も聞きたくなかった声が響いたので、辻霧の顔から面白いようにさーっと血の気が引いた。

玄関口で明日原が驚いて目を丸くした。

「辻霧？ アンタの妹 なわけないわよね」

「………少なくとも俺の知る限りではウチの家系にプラチナブロンドの遺伝子は存在してないと思うが………じゃなくて！！」

ばっ、お前顔出すなってあんだけ ！？

そこではたと辻霧は一つの違和感に思い当たった。

「あ？ 明日原？」

「ん」

「………お前こいつと知り合いだった？」

「まさか。初対面だけど。何で？」

「いや、今こいつお前の名前……」

二人して顔を見合わせ、暦の方を見ると、暦は呆れたように目を細めて二人を睨み返した。

「………立ち話も難だ。中に入ってくれ。大事な話がある」

猫が欠伸をするような表情で、暦は部屋の主人然として二人を招き入れた。

「時に『原石』の存在を君たちは知っているかね」

卓袱台の前に正座させられた辻霧と明日原の前を講義中の大学教授よろしくゆつたりと歩き回りながら暦は静かに言った。

「『原石』」

「？」

「あたし聞いたことあるかも」

言い淀んだ辻霧が隣に目を向けると、丁度暦も明日原の方をメイクを施された左目でじろりと見ていた。

突然注目を受けた明日原は少しだけ躊躇したが、

「学園都市で流行してる噂の一つに

カリキュラム

その、普通能力つ

ていうのは学園都市で決められた時間割りに基づいた開発を受けることで発現するものでしょ？」

「ん？ あ、ああ、まあな」

明日原が意見を発表しているというより単に自分に向かって話しかけているらしいことに気付いて、辻霧は慌てて返事を寄越した。

「『原石』っていうのは学園都市外部の人間であるにも関わらず、開発無しで何らかの能力を自然に発現した能力者のことを言うらしいの」

「『自然に』って……よく分からないんだが」

「えっと、能力開発に必要な条件・環境が偶然揃うことによって……」

「……とでも言うのかしら」

「概ね、正解だな」

それまで黙って二人の遣り取りを聞いていた暦が口を挟んだ。

「けだし、学園都市の『能力者』と『原石』の関係は言わば合成着色料と天然色の関係に近いな。いや、厳密に言えば違うか……まあ大体分かって貰えればそれで良い」

歩き回っていた暦はそこでぴたりと足を止めた。

「『原石』は確かに実在する。故に僕は辻霧、君とコンタクトを取る必要があつた」

「……話し相手の理解が追いつく前に話題を飛躍させるの、やめてくれないか」

暦がクスリと笑った。

「失礼したな。まあまず、僕も『原石』だ」

その言葉の意味が疑惑と驚愕を伴って二人の脳に浸透するのに暫く時間を要した。

「もともとイギリスの方にいたところを六年前に学園都市に保護されてね。学園都市内に戸籍を置くために本名も捨てる羽目になった。学者連中には『シユレー^{ブラックボックス}デインガーの猫^ス』とか呼ばれてたが」

「何なんだよお前の能力って……………」

思わず辻霧が尋ねると、暦は微かに困ったような表情になった。

「ふむ…………… けだし説明するのが実に面倒なのだが。まあ良いか。ちよつとこれを見てくれ」

暦はどこから油性サインペンを持ってくると、卓袱台に直接何か丸とそれを繋ぐ線とで樹系図のようなものを描き始めた。

「あああお前……………」

定価3800円で購入した卓袱台が落書きまみれにされるのを見て辻霧が悲痛な声を上げたが、明日原が目力でそれを黙らせた。

「…………… よし、と。まずこれ」

と言つて暦が指さしたのは樹系図の一番根本にあたる丸だった。

「これを現在 例えばそうだな、現在君が自販機の前で何を買うか迷っているとする」

「ああ、それで？」

「ここで君が『きなこ練乳』を買うか、『苺おでん』を買うかで世界は分岐する。要はフラグが立ったときの選択如何でルートが変わるようなものだな」

「？」

「いや、まあ忘れてくれ…………… それで、だ。僕が言いたいのは選択肢の数だけ『if』の世界が存在するということだ」

そう言いながら暦は最初の丸からジグザグに伸びた左右対称の二本の線をなぞり、各々の終着点である丸を油性ペンでコンコンと叩いた。

「あ、いやちよつと待てよ。お前の能力に関しては分かったつつかまあ分かんなかったけど……とりあえず、俺の部屋に侵入したことについては何の説明も為されてねーぞ」

「それに関しては」

暦が立ち上がった。

「これから説明する。今までの説明は全てこれから話すことの前提条件、前書きの様なものだと思って頭に入れておいてくれ」

「『原石』は極めて稀少だ。世界に五十人いるかいなか……とまで言われている。確かに数多の科学的考察・論証の積層によって生み出された『能力者』は科学の集大成であると言えるだろうし、それを学園都市外部の環境の中で身につけてしまった『原石』はなおのこと稀有な存在であると言える」

卓袱台の向かいに座って手の中で油性ペンをくるくると弄びながら暦は続けた。

「故に学園都市は一人でも多くの『原石』を狙っているわけだ……単なる純粋な研究対象として集めているのか、『能力者』の専売特許を謳っていた学園都市にとって外部に能力者がいるというのが面白くなかったのか……まあ、その辺は僕の知るところではない。だが現状ね」

暦はそこで左手の人差し指をぴんと一本立ててみせると、更にもう一本中指を立てた。

「学園都市は最低二人の『原石』を有している」

「き、君の他にあと一人はいるってこと………?」

「そういうことになるな、明日原。そしてそのもう一人は……
アカシックレコード
『履歴閲覧』と呼ばれている」

暦はそこで油性ペンを弄ぶ手を止めた。

「ここから僕にとつての話の核心なんだが………数日前、僕はとある情報源から彼女が外部の人間から狙われていると知った」

「外部？　なんでまた……………」

「さあね。とにかくそれでなくとも彼女はこれから非人道的な実験の食い物にされるかも知れない」

暦の表情が不意に倦怠感を帯びたものから切実なものへと変わった。

「僕は彼女を助けたい」

全員がしんと黙り込んだ。暫くの間誰も話そうとしないので、やおら辻霧が口を開こうとするとそれより先に暦が言った。

「君にとっての核心はここからだ、辻霧。僕は能力によってあらゆる時系列・選択肢を吟味し、彼女を救い出すベストな手立てを絞っていた。その結果」

既に暦が決意表明をして黙り込んだときから嫌な予感がしていた辻霧は、僅かにつばを飲み込んだ。そしてその予感は的中する。

「君達に協力を要請することが最高のルートだと分かった。そのためここに侵入し、君を待っていた。力を貸して欲しい。辻霧単」

第三章 八月十六日 Black Box Unknown・(後書き)

『原石』 〓 傍目から見ると分かりにくいんだけど概念的にはすごい能力

みたいな認識が自分のなかではあるので(偏見?) 「分かりにくいんだけど何それチート」みたいな能力を模索した結果今の形に落ち着きました。

「なんでこの能力で『シュレーディングの猫(ブラックボックス)』なのか」ってことに関しては説明するのが面倒なので知りたい方は感想コーナーまで

実は「シュレーディング(原作準拠)」にするか「シュレーディング」にするかで迷っていたんですが結局語感がいいので後者に決定しました。気になった方にはここで弁明しておきます；

以上、今回の言いわけ…後書きでしたー

第四章 八月十七日 Superbia 912 .

第四章 八月十七日 Superbia 912 .

ついこの間までの辻霧なら即座に「めんどくさいんでパス」と答えていたかもしれない。しかし、昨日辻霧が出した答えは彼にしては珍しく「保留で」だった。

だがこれまでの強硬姿勢を見せず曖昧な返答を寄越したことで間違いない辻霧は今回の面倒事に巻き込まれるであろうことを薄々確信していた。「やるに決まってるじゃない当然」と息巻いていた明日原が嫌でも昨日パスしなかったことを盾にぐいぐい引きずり込んでくるだろうし、何より 不思議なことに、辻霧自身でここで身を退くことに対して小さな抵抗を感じていた。

「何なんだろうな……全く」

がしがしと頭を掻くと、辻霧はコンビニへの道を急いだ。

明日原先生のありがたい夏期講習に付き合わされた後の帰路、喉が渴いたので校内に設置されている自販機に向かうと見事に空だった。運動部は夏休みも元気に活動中らしい。

仕方なくこうして涼しい路地裏の近道を通って大通りのコンビニへと向かっているという事情だった。

「……………ん？」

ふと前方に妙な人影がいることに気付いて、辻霧は自然と歩調を落とした。

彫りの深い顔立ちと180センチを超える長身からして外国人の青年だと言ったことが見て取れた。ゴシックなデザインのシルバークラスが片耳に鈴なりにぶら下がっており、左目の下に涙のような青色の滴の形をした刺青が入っていた。この真夏日にも関わらずチエ

ツク柄のマントを羽織り、ベルトに装飾的なショートソードがぶら下がっている。

日本に役者修行に来た外国人……と意味不明な想像を膨らませながら辻霧がその横を通り過ぎようとすると、青年が声をかけてきた。

「あ、少年。少しくものを問いたい」
流暢な日本語だった。しかも何か武士っぽい。

「……………何？」
「ああ、五里霧中の私に救いの手を差し伸べる者がいないかと途方に暮れていたのだ」

頭の片隅に『警備員に通報する』という選択肢を留めておきながら辻霧は青年の格好を頭の先から爪先までとくと眺め、慎重に質問した。

「一応アンタ何してる人？」

「……………魔術師、かな」

イングリッシュジョークだと思って笑った方が良かったのか？
だが青年の表情にはユーモアの欠片すら浮かんでいなかった。

「で、何だ？ 俺第7学区の地理はあんまり詳しくないけど」

「ああ、いや何、建物ではなく人を搜しているんだ」

青年は穏やかに言った。

「及萩暦という少女を知らないか」

突然電流のように辻霧の全身に漲った嫌悪感と警鐘を鳴らす直感が絶叫していた。

こいつは間違いなく『敵』だ。

「何者だよ、お前」

明確な敵意と共に脊髄に走る緊張感に身体を強張らせながら辻霧が呟くと、以外にあっさりと自称魔術師は答えた。

「ヴァーダント＝ブレイドアクト……………いや、Superbia 912と名乗った方が適切か。君のその様子を見ると」

ヴァーダントのその言葉の意味するところを理解してはいなかった

たものの、辻霧は今の言葉が間違いなく自分に対する青年の宣戦布告であるということを悟っていた。

「……………悪いけど俺の知ってる『及菰曆』さんは到底お前みたいな異国情緒溢れる怪しいお友達がいるような人ではないと思うんだよね」

「そうか」

水彩画に描き足された油彩の人物のような圧倒的存在感を放つ青年と、騙し絵のように主観的に見れば何ら違和を覚えない不気味な少年が対峙する。

最初に動いたのは辻霧だった。後方に跳びすさると同時に両手を前に突き出し、その動作に伴って黒い正八面体が空間から膨張するようにして出現する。さらに辻霧が指先を動かすと、幻影はシャキーンッ！！と万華鏡の模様の様に展開し、先端に十四本の鋭い四面体を持つ幾何学的な形状に変貌を遂げた。その鋭利な爪が槍のように目の前の青年に向かって突き出される。

その一連の動作が一瞬で完成されたにも関わらず、ヴァーダントがとった行動はただ一つ、腰に下げていたショートソードを抜き放っただけだった。

ギヤインッ！！ とこの世のものではない音が響いた。

（おいおい、冗談だろ

！？）

ありえない現象が起こっていた。

四次元から投影した影に過ぎない辻霧の幻影が、刃も切っ先もないショートソードにバラバラにされていた。

（こいつ

）

その現象から推測される事実は一つしかない。

（次元を切断しやがったのか……………！！）

表情に意外そうな色を含ませた青年が言った。

「ふむ……………学園都市の能力開発についてはある程度聞き及んでいたが、また変則的な能力だな。少年」

「……………お前もな」

それだけ言うつと辻霧は今度は魔術師の目の前の空間を起点にバオツ！！と立方体を出現させる。それを青年は瞬きをするより退屈な動作だとも言つように簡単に切り捨てた。

（……………反応速度が人間業じゃねえだろ……………）

駆けだした青年のルート上に次々と幻影を出現させるも、全て避けられるかショートソードに切り捨てられるかだった。

（これなら　！？）

辻霧は空中に足場となる幻影を作りだして飛び乗ると、その形状をジャキツ！！と地面に向かって突き出される針千本のような形状に変化させた。

ザシユザシユザシユツ！！という凄まじい破碎音と共に足下の地面が連続して爆ぜた。

もうもうと土煙が立ちこめ視界が悪くなる中、辻霧が目を凝らしていたその時、唐突に辻霧の足先数センチの辺りからショートソードの刀身が飛び出し、辻霧の足場を切断した。

「おおっ！？」

不意を突かれて能力に支障を来したのか、辻霧が足場にしていた幻影は一瞬で収縮し、間抜けな声と共に辻霧はドサツと穴だらけの地面に落下した。

「くっそ……………！」

休んでいる暇もない。突進してくるヴァーダントの視界を遮るように巨大な幻影の壁を出現させ、左に転がった。

狙いをつけ損ねたヴァーダントの一撃は辻霧には当たらなかったが、轟音と共にバラバラに吹き飛んだ幻影の破片で辻霧もバウンドしながら地面を転がる羽目になった。

立ち上がると、振り返った魔術師はキュガツ！！と地面を蹴っ

た。

走るだとかそういう次元の話ではない。辻霧が反応するより速く、たった一度地面を蹴るだけで魔術師は辻霧の目の前へと移動していた。

（！！ やつべ　　）

魔術師が微かに口元を歪めた。

「レーヴァテイン」

次の瞬間、魔術師の振るったショートソードの軌道が真つ黒に塗り潰された。

「　　！？　　」

辺りの光源が遮断されて暗くなったのでもなく　　文字

通り完全に、空間のその部分だけが切り取られたかのように、目に入る光という光がゼロになった。

　　瞼の裏側より暗い視界を覆う黒に一瞬辻霧の思考が中断する。後方　　遠近感覚ゼロのこの状況では間違いない間合いを潰される。左右　　それこそ回避に不確定要素が入り込む余地があり過ぎる。残された選択肢は

（　　前方！！　　）

カンで足下に『幻影』を出現させるとそれを蹴って低く構えていた魔術師の肩の辺りめがけて跳んだ。

直後、

「カーテナ」

再び魔術師の声がどこからか響いた途端、辻霧の視界も塗り潰されたときと同じく不意に元に戻った。

「があッ！！」

盲目の状態で跳んだためか、辻霧は空中でバランスを失ってそのまま背中から地面に激突した。着地には失敗したもののどうにか魔術師の必殺の一太刀は空振りに終わったようだ。

咳き込みながら辻霧が振り返ると、魔術師は舌打ちをしながら剣を構え直した。

その時、辻霧はあることに気付いた。

(? あれは

「悪運が強いようだな、少年」

ショートソードをビュッ!! と音を立てて振ると、ヴァーダントは苦々しげに言い放った。

「だが貴様に唯々諾々として情報を提供する意志が無い以上、『シユレーディングアの猫』を追っていることを知った貴様を生かしておく訳にはいかないんだ」

ゆつくりと、魔術師は最後の一太刀を浴びせるべく地面に倒れ込んでいる辻霧に歩み寄った。

「恨みはないが、許せ。そして」

逆光で黒い断罪の処刑人の如く立ちはだかるヴァーダントは、逆手に持ったショートソードの切っ先を下に倒れている辻霧の心臓に向けた。

「速やかに死ね」

辻霧の目が見開かれ、処刑の刃が振り下ろされるその瞬間、不意に魔術師はぴたりと動きを止めた。否、動作を中断したのではなく、文字通り唐突に石化したかのように

「動くな」

魔術師の背後から響いた聞き覚えのある第三の声に辻霧は虚を突かれた。

いつの間にか鏡大路薪奈が、指鉄砲の形にした右手の銃口に当たる人差し指を魔術師の背中に突きつけていた。即ち『触れた物体の質量、熱量、体積に関わらず慣性を無視してその運動状態を「静止」にする事ができる』その指先で。

「無様だな、辻霧」

命助けた後の最初の一言がそれかよ。

「.....つかお前はここで何してるわけ」

「別に。偶然通りかかっていたら一方的な『弱いものいじめ』の一場面が視界に飛び込んできたまでのことだ」

「……………」

不服そうに口をへの時に曲げる辻霧を無視し、鏡大路は捕縛したヴァーダントに話しかけた。

「さて、何が楽しくてこんな阿呆を弄り倒してたんだか吐いて貰おうか。返答次第では氷河時代体験のおまけ付きで警備員アンチスキルにご厄介になることになるが」

ヴァーダントは暫く黙ったままだった。が、不意に苦々しげに口を開き、一言だけ発した。

「フラガラッハ」

「……………」

咄嗟に鏡大路が前に転がったのも無理はなかった。魔術師がそう呟いた刹那、彼の手握られていたショートソードが意志を持った生き物のように手から飛び出すと、大気を引き裂いて上空に舞い上がり、レーザーのような精度と速度で真っ直ぐに鏡大路が今までいた場所を貫いたからだ。

鏡大路と辻霧が立ち上がったとき、既に魔術師は地面に突き刺さったショートソードを引き抜いて体勢を立て直していた。

「そろそろ退き際のようなだな。この辺りで失礼させてもらう。だが少年」

ヴァーダントはショートソードで真っ直ぐに辻霧の心臓を指した。「君は間違いなく本件を持って私の敵となった。次に会うときは必ずその息の根を止めてやる」

そう捨て台詞を残すと、魔術師は地を蹴り、超人的な脚力でビルの壁を蹴って屋上へと跳び去っていった。

「……………」

「私が聞きたいよ。というか何がどうなってお前は見ず知らずの外国人とセッションしてたんだ」

ヴァーダントが去ってから急に足の力が抜けてへたり込んだ辻霧

は、実にめんどくさそうに鏡大路の方を見上げた。

ここで説明すると及萩暦の訳の分からない依頼に鏡大路を巻き込み、結果さらにめんどくさい状況に陥るかも知れない。しかし説明しなかったらしなかったで文字通り身も凍る体験を余儀無くされる恐れもある。

二つの面倒事を秤にかけ、辻霧は仕方なく言った。

「……役者志望の外国人に稽古を付けて差し上げてました」
ぶん殴られた。

第四章 八月十七日 Superbia 912・（後書き）

はい、戦闘パートです。

こいつらの場合別次元でどういうことになってんのか考えながら書かなきゃならんで非常に面倒くさい思いをしました覚えがあります。

「全次元切断術式とかまた厄介なもん考えつきやがって鎌池め」みたいな（嘘）

正直この戦闘シーン書いたのが結構前であるにも関わらず、「これ辻霧絶対ヴァーダントに勝てないんじゃない？」と自分自身で掘った思考の泥沼にはまり、解決できたのがつい昨晚でした（アホ過ぎる）何はともあれ、あと三章程度で第二話完結です。どうぞお付き合いください

第五章 八月十七日 Stand Face To Face .

第五章 八月十七日 Stand Face To Face .

「厄介な奴に目を付けられてくれたな辻霧単」

帰宅後ごく当たり前のように施錠しておいたはずの自室でくつろいでいた隣人にその日のことの次第を説明すると、暦は眉間に皺を寄せてさほど焦っていないような様子で言った。

「何なのあの……『厄介な奴』って。お知り合い？」

午前中は明日原の説法めいた講義に延々付き合わされ、午後は午後で自称魔法使いの怪しいにーちゃんにどつき回された挙げ句年下の女子に殴られるという散々な目にあつた辻霧は満身創痍で玄関に大の字に寝転がりながら首だけリビングの方に向けて呻いた。

「まあ……な。英国^{むいとう}に居たとき顔馴染みだった程度だが」

「件の『原石』を狙ってる外部の人間って奴か？ にしても狙われてんのは……なんつったつけ？ お前のお友達の方じゃないの？ あのピアスゴリラお前のこと探してるみたいだったけど」

「けだし、広大な面積の見知らぬ土地から所在も分からない人間を捜し出すよりはその所在を知っている知人を狙った方が効率が良いということだろうよ」

何とか半ば蹴飛ばすようにして靴を脱いだ辻霧は足だけで仰向けのままずりずりと廊下を滑っていくと、そのままリビングにごろりと寝転がった。

「つか気になってたんだが、あの野郎『魔術師』がどーのとかほざいてたぞ。日本語の苦手な海外の能力開発機関の回し者とかそういうオチをこっちは期待してるわけだが」

暦は卓袱台の上で膝を抱えてテレビのバラエティ番組を見ていた

が、それを聞くとなぜか侮蔑するような眼差しで辻霧を見下ろした。
「……………身を以て体験した事実を否定し、不安定な大衆心理の上に成り立つ常識に縋る人間を僕は『愚か者』と呼んでいる」

「あー分かった分かった。俺はそこまで固い頭はしてないから……………てことは実在するのか。魔術師って」

「そういうことになるな」

「ふうん」

「……………」

「……………何だよ」

「……………いや、あっさり納得したなあと」

「別に何が現実で何が虚構かなんて興味ねーし。『事実』は小説よりも奇なり』っつーだろ。お前みたいなぶっ飛んだやつが世界に十人も存在してるくらいなんだから今更魔術師の一人や二人天から降ってこようが地から湧いて出ようが俺は気にしないよ」

暦は暫く黙っていたが、やがてテレビの音量を下げると辻霧の方に向き直った。

「そうか。けだし、気にしないのは結構だが、必ず近い内に君は再び彼と見えることになるだろうね」

「は？」

「左腕」

暦が無造作に指し示した自分の左腕を見やると、二の腕の裏に紙切れが貼り付いていた。間違はなく普段通りにしていれば気付かないような代物だ。表面に刺々しい複雑な記号が書き込んである。

「これって……………」

「簡単な追跡探索用術式だな。つくづく厄介な男だよ、あいつは」
ぴよんと卓袱台から飛び降りた暦は事も無げにそう言うべりつとその紙を辻霧から剥がした。

「ちよ、ちよっと待て。てことはここが……………」

「ああ。バレてるな」

「やばー……………くないか？」

「けだし」

暦は剥がした紙切れを見ながら慎重に言った。

「今急襲するということはないな。奴の狙いはあくまで『履歴閲覧』だ。来るとすれば……僕達が『履歴閲覧』を救助してここに帰って来たときか、そうでなければ救助に向かった先かな。まあ念入りの奴のことだから術式が剥がされてもしばらくの間効果が生き続けるくらいの応用は施しているだろうし」

「んじゃ術式の効果が薄れるまで待機して、救助した後ここに帰ってこないとか……」

「そんなことをすれば奴は必ず別な何かを仕掛けてくる。この寮の人間全員を人質にとるか……まあ方法はいくらかでもある。それにあまり彼女の救助を先延ばしにしたくない」

暦はそう言ってきつと真正面から辻霧に向き直った。

「今夜だ」

「？」

「今夜決行する。明日原にも伝えておきたまえ。夕飯を済ませたらすぐにここに来いと」

「第一八学区更級薬学部保健センター……………ね」

深夜、終バスを乗り継いでやってきた三人の目の前には巨大な建物がそびえていた。全体的に丸みを持たないフォルムと白い外観が研究所や病院を連想させる様相を呈していたが、今やそれらも夜闇に紛れ、不気味な雰囲気である。

「本当にこんなところにいるのか？ そのア力何とかさん」

「けだし、確かだ」

そう言つと暦は建物の周囲に張り巡らされていた鉄条網の柵をよじ登り始めた。幸い風が強かったので登る音はあまり目立たない。

暦の後に続こうとした明日原を辻霧が呼び止めた。

「おい」

「何よ」

そう変にくぐもった声で言って振り返った明日原の姿に辻霧は溜息を禁じ得なかった。黒い半袖のシャツに灰色の短パン、そして野球帽にサングラス、止めとばかりにマスクまでしている。肩からはそこにあるのが当然であることを主張するかの如く金属バットの黒い細長いケースがぶら下がっていた。

「……………もうちょっとマシな格好は出来なかったのかお前は」

「失礼ね。超が付くほど完璧じゃない」

「……………」

とりあえずこいつがヘマをやらかして捕まっても見捨てていこうと決意する辻霧だった。

先に鉄条網を登り終えていた暦が辻霧を手招きした。

「あそこ」

「ん？」

「警備員がいる。『幻影』で注意を引き付けられるか？」

「……………やってみる。合図したら降りるよ」

辻霧は鉄条網の上で慎重に手を伸ばすと、複雑な形に指を曲げ、組み合わせた。すると不意に自分達のいる側とは警備員を挟んで反対側にすいっと『幻影』が出現した。暗がりで見れば人型に見えないこともない。

「やるじゃないか」

「……………賞賛どうも。それは良いけどさっさと行ってくれ。指が攣りそうだ」

辻霧がもう一動作加えると幻影から鋭い棘が伸び、向こうの鉄条網の一部を破壊した。警備員がそれに気付いてライトを幻影の方に向けると同時に、辻霧は幻影を一気に収縮、消滅させ、足音を忍ばせて先に柵を降りていた二人の後に続いた。警備員が一瞬ライトが照らした人影を怪しんで持ち場を離れるのを確認し、急いで建物の影に隠れる。

「で、どこから入れるのか分かってんだろっな一応」

「厳密に言えば分かっていないがね。こっちだ」

能力でルートを特定しているのか、暦は猫のように敏捷に二人を導いていった。途中「端に寄れ」「壁に背を付けて」等と指示していた辺り、監視カメラの位置まで把握済みらしい。

「さて」

どこをどう抜けたものか、一行は建物の中庭のような場所へ出ていた。

暦は左手奥の方にある少し高い位置の窓を指し示した。

「けだし、丁度高校生二人が肩車すれば届きそうな位置じゃないか」

「……………」

「……………」

「「じゃんけんぼんっ!!」」と威勢良く辻霧がチョキを出し、明日原がグーを出した。

「『重い』とか言わないでよ」

「キツイ」

「……………」バカ」

明日原が窓の棧に手をかけてスライドさせると、あっさりと窓は開いた。

「どこぞの研究員が煙草でも吸おうとして開けっ放しにしていたんだろっね」

先に明日原が辻霧の肩の上から窓を潜ってもぞもぞと侵入し、続いて暦が明日原に引つ張り上げられて中に入った。最後に辻霧が四苦八苦しつつもどうにか中に転がり込んだところで明日原が窓を静かに閉め切った。

「ここから先は監視カメラを気にしなくていい」

「……………」？ 何で？」

「それが……………」

そう言った暦自身腑に落ちないという表情をしていた。

「なぜかよく分からないが監視カメラの機能が妨害されているんだ。リアルタイムの映像を送信できていないらしい」

「あの野郎か」

「けだし、そんな術式は無かったはずだが……」

一行が侵入したのは薬品保管庫のようなところだった。硝子製の「予備知識のない方は触らないで下さい」と書いてあるような大小様々の瓶がぎっしりと並ぶ埃っぽいアルミ製の棚の間を縫うようにして進み、音を立てないように慎重にノブを捻ってドアを開け、ひんやりとした廊下に出る。非常灯だけが煌々とケミカルな緑色の光を放っている様は不気味だった。

複雑に入り組んだ廊下を例によって暦の先導で進みながら、辻霧はふと気になっていたことを尋ねた。

「そう言えば外部の能力開発機関じゃないなら何で『魔術師』が『原石』を狙うんだ？」

「…………… 僕の実力の説明と聞いてどうしてこうぼんぼん面倒な質問ばかりしてくるんだ君は」

「こちとらいきなり訳分からん世界に放り込まれて頭のキャパが許容量越えてんの。…………… ったく知らない方がめんどくさいなんて状況初めてだ」

「良い兆候じゃないの」

明日原が口を挟んだ。

「ところで『魔術師』って？」

辻霧と暦は顔を見合わせたが、暦は「任せた」と言い、辻霧は「その内分かる」と言って話はそこで終わった。

「止まれ」

不意に暦が辻霧達を制した。

大凡十分は複雑に入り組んだ廊下を進み、確実に建物の深層へと近付いていた頃だった。

廊下の奥の暗闇を凝視しながら暦は低い声で言った。
「いる。ヴァーダントだ」

「お出でなすったか。で、どうするんだ？」

「決まってるだろう。明日原」

「何？」

暦が近付いてきた明日原に何か耳打ちすると、明日原は怪訝そうな表情で何か聞き返したが暦は大丈夫だという風に首を振っていた。辻霧には何を話し合っているのか全く聞こえていない。

「おい、何だ？」

「ちよつと待つててくれ。すぐ教えるから」

更に暦は何か耳打ちし、明日原は漸く身を起こすと辻霧達が進んでいたのと逆方向に足音を立てないように去っていった。

「大丈夫か？ あいつ一人で行かせて？」

「センター内のセキュリティが作動する恐れが無い以上、現状注意すべきはヴァーダント一人だろう。『履歴閲覧』までのルートは教えておいた」

そう言うつと暦は辻霧の前に一步出た。

「……来るぞ」

廊下の奥の暗闇で何かが動く気配がした。やがて長身の魔術師は緑色の非常灯の下に姿を現した。

「キリエだな」

「ヴァーダントか」

キリエと呼ばれた暦は臆することなく自分より十センチは高い位置にある魔術師の視線を見返した。

「貴様ならここへ来ると信じていた。美しい友情だな……七経つても貴様は変わらない」

「けだし、お前こそ未だに外から与えられた力に固執する傾向は治つちやいないだろう。進歩が無いな」

「進歩、か」

魔術師は暦の言葉を鼻で笑い飛ばした。

「今の私を七年前の私と同じだと思って貰っては困る。そして私の存在を以て英国は進歩する」

「歴史の過ちを繰り返す気がヴァーダント」

不意に暦の声色が怒気を帯びた。

「……………何の話だ」

「巫山戯るな。お前のその霊装と『履歴閲覧』の二つが揃えば目的は火を見るよりも明らかだ。止せ。アレが今更女王の手に渡ったところで真の統治は復活しない」

「おい、さっきから意味わかんねーんだけど」

背後からの憤りと前方からの威圧感に挟まれて重圧に押しつぶされそうになっていた辻霧が見かねて言った。

「奴の目的は故国の栄華の復活だ」

ヴァーダントから目を離さないまま暦が唸った。

「奴はそのためにはかつて英国の統治者が振るったという宝剣

カーテナが必要だと考えている」

「当たり前だ。お前の言った『歴史の過ち』はカーテナが人類がその全力を振るうには早すぎる力だったこそ起きたことだ。故に時は満ちた今こそ復興の時だと私は考える」

傲然と言つてのけたヴァーダントをなおも暦は睨み続ける。

おずおずと辻霧が、

「……………要は昔人の手に余るような武器が英国の衰退の原因になったにも関わらず、こいつはもう一度それを手に入れようって魂胆か」

「飲み込みが早いようで助かるな」

「それは良いが……………で、『履歴閲覧』は何で必要なんだ」

意外にもその問いに答えたのはヴァーダントだった。

「

『履歴閲覧』は

第五章 八月十七日 S t a n d | F a c e | T o | F a c e . (後書き)

次章、いよいよ履歴閲覧の能力とヴァーダントの目的が明かされます。

更新空くかもです。

感想お願いします!!

第六章 八月十八日 A c a s i c | R e c o r d | U n k n o w n .

第六章 八月十八日 A c a s i c | R e c o r d | U n k n o w n .

幾つもの怪しげな部屋を通り抜け、迷路のような建物の中を何とか教えられたルート通りに進み、漸く明日原は隔離病棟のような一室に辿り着いた。

「えーと、セキュリティはダウンしてるのよね。ここも……」

明日原が病棟の戸を引くと、役立たずの電子ロックが取り付けられている重たい扉はゆっくりと開いた。

「お、お邪魔しまーす……って言うのも変ね、この場合」

独りで深夜の広大な建物の中を徘徊することに心細さを感じているのか自ずと独り言が多くなっている明日原だった。

「……『履歴閲覧』さん？」

「どなた？」

病棟の奥のカーテンの向こうから鈴を転がすような細かい声が聞こえた。

明日原が近付いて恐る恐るカーテンを引くと、痩せた少女がベッドから身を起こして自分の方を見つめていた。肩くらいまである艶を失った黒髪が微かに揺れる。

「あ……えっと及菰暦って人に言われてあなたを助けに来たの。逃げよう。何か、『魔術師』って人も来てるみたいだし。急がないと『暦ちゃんか？』」

『履歴閲覧』は驚いたようにそう言うと、腕に取り付けられていた点滴のチューブを抜いてベッドから出ようとした。その脆弱な体が地に足が着くと同時によろけるのを見て明日原が手を貸す。

「乗って。暦ちゃんの所まで走るから」

「あ、はい。すみません」

やけに時間をかけて『履歴閲覧』は明日原の背によじ登った。

「よし、と……急がないと……辻霧が……」

「『履歴閲覧』の能力は極めて変則的だ。以前見えた君を凌駕する程ね」

魔術師は淡々と言葉を続けた。

「カーテナは今や厳重な警戒態勢の元に保管という名目で封印されている。その製法は今や失われ、実物を忠実に真似て作られたセカンドさえオリジナルの二割程度の力しか持たない。そこで……『履歴閲覧』の出番となるわけだ」

「何

？」

「『履歴閲覧』には過去が見える」

双方、動く者はなかった。暦の目つきが一層険しいものになるのも構わず、ヴァーダントは言う。

「この世の、ありとあらゆる空間に刻み込まれた履歴を閲覧する。即ちカーテナの失われた製法さえ見ることが可能だ。その意味するところはカーテナの完璧なコピーを作り出せるということだ」

「……王になる気がヴァーダント」

「まさか。そんな大それたことは考えてはいない。私はあくまで国に忠義を尽くす騎士として己の信念を貫いているまでだ」

魔術師の言葉に嘘は無かった。少なくとも辻霧にはそう感じられた。嘘などという軽々しい言葉で塗り固められるほど半端な覚悟ではないことを、この場にいる全員が感じていた。

ややあつて暦が苦々しげに言い放った。

「けだし、それがお前のそもその間違いの元だヴァーダント。武装がもたらす繁栄などという安易な青写真に目が眩み、民心という最も国力の糧となり得るものから目を背け
国への忠義
などともよくも言えたものだ」

「戯れ言だな」

次の瞬間、既にヴァーダントは辻霧の目の前にいた。

「……っ！？」

「カーテナ」

魔術師がそう呟いてショートソードを抜き放つと同時に辻霧は曆に背後から足払いをかけられ、思い切り廊下に倒れ込んだ。その鼻先すれすれの所をショートソードの刃が通り過ぎる。

「左に転がれ、辻霧！！」

飛びすさつて安全圏に逃れた曆が叫んだ通り、辻霧が左に転がると間一髪で全次元を切断するショートソードがゴバツ！！と廊下を挟った。

「がはッ」

咳き込む間もなく曆の指示とヴァーダントのショートソードが飛んでくる。

（早

）
ガガガッ！！と次々と遮蔽物を無視して廊下を切断していく魔術師から逃れるべく、辻霧は手近な部屋に飛び込んだ。

何かの実験室であるらしく、いくつものテーブルと実験用の機材が置いてある。

（くそ

）
何か無いか……！？

悠然とヴァーダントは実験室に足を踏み入れた。曆を襲っても彼女の能力で攻撃は全て見切られてしまう。それならば自分に対して防御の術を持たないあの少年を狙った方が得策だと思ったからだ。

「出てこい。大の男が逃げ隠れるなど騎士道に反する」

その時、ヴァーダントは見た。

自分の入ってきたドアとは反対側の入り口から火の点いたマッチが投げ込まれるのを。

（まさか

！？）

彼の目が引火の直前、床で割れて転がっている気化水素の大瓶と開けっ放しになっているガスの元栓を捉えた。

研究室そのものが一つの爆弾と化す直前、部屋の外にいた辻霧と曆は魔術師の言葉を聞いた。

「デュランダル」

グバツ！！！！！！！！ という轟音と共に爆風が巻き起こり、金属製の扉が内部からの圧力に耐えきれずクシャクシャになって吹き飛び、反対側の壁に激突した。

「がああああああああアアアアつつつつつ！！」

自分で仕掛けたにも関わらず耳を塞いでも耳朵を叩く爆音に思わず辻霧が叫んだ。

少ししてから落ち着いた頃、恐る恐る辻霧は実験室の中を覗き込んだ。

そして。

焼け焦げ、原形を留めない机や実験機材の残骸の中、爆心地に無傷で立つ魔術師を見た。

「その霊装

！？」

曆がぎよつとして目を見開いた。

「流石に気付いたか」

ヴァーダントは微笑するとカーテナ「レプリカをくるりと回した。」「たかが騎士崩れの半人前魔術師が『何でも斬れる剣』一振りです世界に闘いを挑めるとでも本気で思っていたのか？ 私の覚悟も見くびられたものだな」

「汎用型霊装の応用か。術式解釈の矛盾の網の目を潜るのはさぞか

し骨が折れたことだろうよ」

「ど、どうということだよ」

「？」

驚愕に立ち竦む辻霧にヴァーダントは表情に余裕の色さえ滲ませながら簡単に説明した。

「つまり この剣はカーテナに留まらず、世界中のありとあらゆる剣に纏わる術式を重ねているということだ。私が指定した霊装に次々とこいつは化けるぞ、少年」

『光の殺戮術式』を持つレーヴァテイン、『現象切断術式』を持つデュランダル、『必殺術式』を持つフラガラツハ、そして『全次元切断術式』を持つカーテナ 状況に応じて、ヴァーダントのショートソードはその特性を変える。

先刻の「爆発」という現象はデュランダルによって切断されたようだ。

「 武装を一番の力だと考えるお前に相応しい霊装というわけか」

嘲るような調子でそう言った暦の表情に同時に焦燥の色も浮かんでいるのを辻霧は見取った。

じりじりと後退りながら暦は低い声で辻霧に囁いた。

「一旦退くぞ。そろそろ明日原が『履歴閲覧』を救助し終えているはずだ」

「あの魔術師はどうするんだよ」

「……逃げながらも対策を考えるしかない」

「走るぞ」という暦の一言と共に二人は踵を返して廊下の暗闇に向かって駆け出した。

魔術師が焦る必要はなかった。確実に二人を捕らえきれると分かっていたからだ。それを踏まえた上で暦は逃走に踏み切った。

明日原の戻りのルートを逆から辿っていったので三人は簡単に合流できた。

「『履歴閲覧』は!？」

「無事確保! ちよつとアンタが背負つて」

枯れ木のように痩せ細つた少女を辻霧が背中に背負い、再び三人は走り出した。

「どつちだ!？ どつちに行けば奴を撒ける？」

「……………」

暦は突然立ち止まり、考え込むように押し黙ってしまった。

「……………？ おい、どうしたんだよ及萩……………」

「……………こつちだ」

暦は黙り込んだときと同じくらい唐突にまた駆け出した。

ジグザグに廊下を疾走し、一行は全体的に細長い妙な部屋に出た。いくつもの円筒形の水槽のようなものが両脇の壁に並び、仄かな光を放っている。その向こう側に右側の壁から伸びる通路があつた。丁度部屋と通路が丁字路のように交わっているらしい。

「培養器……………?」

明日原が思わず呟いた言葉を見、暦は部屋の中へ入っていくとそこで立ち止まつた。

いよいよ怪訝に思つた辻霧が問いた。さうとしたとき、暦が声を發した。

「無理だ」

「え？」

「あの時点でどのルートを選んでも捕まることになっていたらしい」
「……………」

その言葉が合図だつたかのように、部屋の反対側の暗闇から魔術師が姿を現した。

「諦めが早いようで助かる。『履歴閲覧』をこちらに寄越せ」

「……………断る」

全ての手段が封じられてなおも暦は決然と言つてのけた。

「今更英国が強大な武力を持ったところで近隣諸国との新たな軋轢を生むだけだ。分らないのか？ お前は戦争の火種を祖国に持ち

帰ろうとしている

「笑止千万だ。どちらにしろ全てはここで決まった。命をなげうつてその火種とやらをこちらに引き渡すか、生きたまま引き渡すか、その違いしかない」

「無駄です」

不意に辻霧の背後から第五の声が響いた。

『履歴閲覧』は辻霧の背の上で衰弱しきった様子で、それでも断言した。

その時辻霧は気付いた。

「あれ

お前

ほぼ同時にヴァーダントも気付いたようだ。

まるで信じ難いものを見たかのような、絶望しきった表情で声を発した。

「……………っ！？ き、貴様

目が

「はい。見えません」

『履歴閲覧』は何の感慨もなくそう言った。

見えない目で、真っ直ぐに魔術師を見つめながら彼女は続けた。

「故に貴方の悲願は遂に叶わぬものとなりました。もう私の目が空間の履歴を見ることはない
これ以上、『原石』等とい

う呪われた存在に頼らないで」

「呪われた…………？」

「学園都市の狂った実験のモルモットにされるためだけに世界中から集められた『原石』に人権は望まれない」

『履歴閲覧』はなおも言う。

「量産型『幻想殺し』イマジンプレイカーの試作開発『実行不可』ドットエグゼ、『存在の定義』確

立のための実験材料だった『座標消滅』……………みんな半月も保たずに壊れてしまった。今の彼らの状態だったらそれこそ死んだ方がどれだけマシかも知れない。そして私は永久に光を奪われるだけで済んだ。今やここにいる私達に存在意義はありません」

「だ、
だ、
が」

全てが無駄であつたという眞実は如何なる匠の手によつて鍛え上げられた鋭刃よりも残酷に、魔術師の胸を貫き、根幹を揺るがしてゐた。

不気味な沈黙が辺りを支配し、ここに一人の青年の大望が崩れ落ちる音を確かにこの場に集った全員が聞いていた。

だが、

八八八

永遠とも思われた静謐さを破ったのは、魔術師の口から漏れだした気の触れたような哄笑だった。

[illegible]

理由の分からない恐怖にぞっとして一歩退いた曆達を後目に、魔術師は嗤い終えた後の仰け反るような姿勢そのままに平坦な口調で言葉をついだ。

「……だからどうしたと言っただ？　方法はまだ幾らでもある……ここは学園都市だ、最先端の技術を以てすれば視力を回復させることなど容易いはずだ」

「でも

「それならばもう実験材料を回復させる手立てくらいここの研究員が講じているはずだとも？　それは奴らが大事な『原石』がこれ以上傷つくことを恐れている故だ。学園都市の最暗部になれば

あるはずだ。例えそこな少女が完璧に壊れるとしても、能力だけを生かす道が

「ヴァーダント、お前ッ!!」

今までの遣り取りの中で一番激昂し、感情も露わに唇が怒鳴った。明日原はおぞましいものでも見たかのように口元を抑えて目を見開き、そして辻霧は

「悪い明日原、ちょっとこいつ預かってて」

いつもの無表情で淡々とそう言っ、戸惑う明日原に『履歴閲覧』を預け、前に出た
ヴァーダントの前に、立ち塞がった。
そして、

ズドドドツツッ!!!!!!!!!!!! と、

爆発音にも似た凄まじい轟音とともに、辻霧の足下の床から夥しい数の鋭い棘状の『幻影』が爆ぜた。

『幻影』は培養器の幾つかを吹き飛ばし、そのまま消滅した。

爆心地にいた辻霧の表情は丁度影になってよく見えなかった。いつものように無関心な表情を浮かべていたのかも知れない。しかし、次の瞬間彼の発した言葉に含まれる底知れぬ静かな怒りに、彼の背後にいた三人はおるか、眼前のヴァーダントでさえも僅かながら戦慄する。

「……いやさ、国だとか『原石』だとかよく分かんねーよ。めんどくせーし。なんか勝手によろしくやって下さい……って感じ？」

その言葉自体は普段の彼のものと変わらなかった。
だが、

「んだけどなあ……うん、よく分かんねーけど、ムカついた。とり

あえずお前はぶっ飛ばすことにする」

更新空くって言ったその日中に更新って何なんでしょうね。

あんまり僕の言うこと信じないほうがいいです。

次回はスーパ―主人公タイムです。

あとお気に入り登録がいつの間にか二桁に増えてて吃驚しました。
未長くよろしくね!!

第七章 八月十八日 Rail Gun Level?

第七章 八月十八日 Rail Gun Level?

啖呵を切った手前、退くわけにはいかない。

普段の辻霧ならば「そんな義務はない」と屁理屈をこねていくだけでも退避できたはずだったが、今の彼にそんな選択肢は思い浮かばなかった。

ただ、己の内側で突然爆発した感情がメラメラと皮膚を内側から舐め、脳髓を焦がし、目の前の奴を倒せと全身の神経を震わせて絶叫する。その破壊願望はとてつもなく原始的で、そして今までも同じようにずっと存在していたように辻霧には感じられていた。口から迸った支離滅裂な言葉の羅列も、眼前の強大な敵に向かって踏み出したこの両足も、合理性の欠片もないものであると頭の片隅で理解していたにも関わらず、なぜか辻霧は「正しい」ということだけは確信していた。

(ああ……………こいつ……………)

その後姿を眺めていた明日原は呆れたように息を吐いた。

(怒り方も知らないんだ……………)

「『ぶっ飛ばす』？ 貴様が？ この私を？」

反対に、手にしたショートソードの切っ先まで冷淡な合理性に染まり切ったヴァーダントは、嘲笑とともに辻霧のこの冷たい怒りに真っ向から対峙した。

「つい先日私に敗れたばかりだということをもう忘れたか？ 増してや先刻の短い戦いの中でさえ、貴様は私に手傷一つさえ負わせ損ねている……大言壮語も大概にしておけ、少年」

「『つ・じ・ぎ・り・ひ・と・え』だ、クソヤロー」

一音一音区切るように名乗ると、辻霧は背後に佇む暦たちの方を

振り向いて言った。

「『履歴閲覧』連れて先に逃げてろ」

「でも」

「分かった」

曆は明日原の抗議の声を遮ってそう答えると、明日原のシャツの袖を引いて部屋から続く廊下の闇へと走り出した。

咄嗟にヴァーダントが三人に追い縋ろうと一歩踏み出すも、だらりと両腕を下げた辻霧がその進路を塞ぐ。

「行かせねーよ」

ヴァーダントは一瞬逡巡するように身じろぎしたが、すぐに優越の表情と共に辻霧を見下した。

「ふん、高々数秒の時間稼ぎで私を止められるとでも？」

「やってみるよ……………！」

辻霧の足下から不意に巨大な右腕を模した『幻影』が出現する。

『幻影』は手を開くと魔術師を圧殺せんと凄まじい速度で掌底を放った。

しかし、

「児戯」

霊装の一閃の前にバラバラに吹き飛ぶ。

だが、既に辻霧は放たれた掌底と同時に魔術師に接近していた。

魔術師の眼前に『幻影』を

「無駄」

頭上から無数の槍を

「だと」

全方位からの拘束

「言う」

思い出せ

「のが」

あの時、俺は

「分からのかああああああアアアつつつ……………！！！！！！！！」

ヴァーダントの必殺の刺突が直前に出現した『幻影』の盾を貫き、一瞬で無防備となった辻霧を

「ほ、本当にあいつ一人残していつて大丈夫だったの？」

暗い廊下を疾走しながら、明日原が息を切らしつつ厩に尋ねる。

「あの『魔術師』ってやつなんか強そうだったし……っ、辻霧のアレが効かないって」

「大丈夫だ」

それでも、厩は断言した。

「僕が何のために君達を選んだと思っている」

(なぜだ ?)

確かな手応えと共に食い込んだ、ショートソードの切っ先が持ち主の困惑を帯びて揺れる。

(なぜ)

どう思考しても眼前の光景を否定する要素は転がっていなかった。それこそ、まさしくありえない現象が起こっていた。

「なぜ、受け止められている？」

辻霧の背後には歪な人型をした『幻影』が出現していた。その左手が辻霧本体に届く寸前だった魔術師の剣をがちりと掴んでいる。その動作に同調シンクロしているかのように何もない左手を握りしめている辻霧は、獰猛な笑みと共にヴァーダントの顔を見上げた。
「当たり前」

次の瞬間、辻霧は左手を握りしめたまま前に一步踏み出すと、右

その『幻影』を切斷し損ねていたのだ。

では、自分自身を基点とした『幻影』ならばカーテナに対抗し得るのかというところでもないらしい。その証拠に最初の戦闘で啖呵を切った際の一撃は自分自身の両手を基点にして出現させていた。

（何だったんだ……？ 何かの発動条件があるとか………？）

辻霧自身、未だに自分の能力に関して未知の部分が多い。

自分の手のひらを見つめて自問自答していた、その時、

むくりと、魔術師は立ち上がった。強靱な信念のもと、背負わされた重苦しい現実とその重圧に抗うかのように。

「ふざ……ける、な……… ふざけるなよ………」

口の中を切ったのか、唇の端から細い血の筋を滴らせながら妄執に取り憑かれたような双眸で仁王立ちする魔術師の姿は、凄絶の一言に尽きた。

「六千万の民草……… 九百年の歴史……… そして誇りだ………」

ぞつとして辻霧は一步身を退いた。魔術師の鬼気迫る姿に気圧されたのではない。目の前のこの男は辻霧には理解し得ないものを、そして理解できたとしても到底耐え難い程の十字架を背負っている。その事実が辻霧を本能的にたじろがせた。

「それを……… こんな……… 所で……… 挫折しているわけには……… いかんだああああああアアアアア………」

血を吐くような絶叫と共に魔術師は真っ直ぐ辻霧達に向かって走り出し、部屋の丁字路の真ん中に踏み出した。

その、直後。

ゴバツ！！ という轟音が鳴り響き、辻霧の視界を真っ白な閃光

が染め上げた。

「あ……………」

一瞬、辻霧には何が起きたのか全く理解できなかった。
少なくともアレが魔術師による何らかの能力ではなかったということは分かる。

全身の産毛が逆立ち、辺りの空気が電荷を帯びている。その時になつて漸くアレが莫大な破壊力を伴った超電磁砲レールガンのようなものであったということを辻霧はぼんやりと把握した。

超電磁砲は通路の奥から分岐点に踏み出したヴァーダント諸共立ち並ぶ培養機の様な設備を吹き飛ばしていた。あちこちでバチチッ！！ と回線がショートし、次々と爆発しているようだ。

呆然としていた辻霧は天井が崩落する音ではつと我に帰った。ドン！ ドン！ と連続して倒壊していく部屋の中、辻霧は先刻の超電磁砲が壁に空けた大穴から外に脱出した。

第七章 八月十八日 Rail Gun Level? (後書き)

サブタイトルの日付でなんとなく気づいてた方もいたんじゃないでしょうか？

おいしいところは第三位が搔っ攫っていくの法則でした。

行間

行間

重い体を引きずり、壁に半ば身をもたせかけるようにして一歩ずつ進む。

荒い息を吐きながら、ヴァーダントは街灯の光も射さない路地裏を歩いていった。全身に残る痺れは未だに抜けきっていない。

あれから二時間経った。

果たして明日の日が昇るのを見られるのかも分からないほどボロボロの状態の中、ヴァーダントは自分の唯一の武器であったショートソードを握りしめながら己に問うた。

結局、全て無駄だったのだろうか？

衰退する故国を見ていられなかった。

今までやってきたことを、何もかも中途半端な己自身の不甲斐なさを埋め合わせるための口実に貶めたくなかった。

何よりも。

「……キリエ

背後から自分自身の左胸を貫く腕に目を落としながら、末期の吐息と共にその名を呟く。

どこまでも意気地なしだったからこそ、こんな手段しか選ぶことが出来なかった
故国に貢献すれば、学園都市に幽閉される『原石』達を救い出すための援助が得られるだろうと。

「悪いな、ヴァーダント」

腕の主は、自身の殺した相手を見据えることなく誰かに弁明するように呟いた。

「テメーにも大儀があったんだろーヨ。それが何だったのかとか、

テメーがどういう人間だったのかとか、そんなこと俺らは知らねーからサ」

新河は静かに腕を引き抜くと、冷たい路地裏に倒れ伏した魔術師に背を向けた。

「せめて、許せ」

一欠片の情すら許されない。それが、学園都市の闇。

志半ばで意識を失いつつあるヴァーダントに、新河の贖罪の声が届いたかは定かではなかった。

彼自身、胸の内で許しを請うていたから。

（許せ

キリエ

）

そして、魔術師の意識は混濁の内に堕ちていった。

（

我が異母妹よ）

行間（後書き）

結局ヴァーダントは弱虫の嘘つきなんですよ。自分自身も騙して。次回、終章です。

終章 後日 B a d / T r u e | E n d | A n d .

終章 後日 B a d / T r u e | E n d | A n d .

「ヴァーダントを消した」

殺人の報告は買い食いと共にひどく無造作に為された。

白い安楽椅子の上に身を横たえて窓の外の景色を眺めていた暦は、異母兄の死を聞いても睫毛一本さえ微動だにしなかった。

暦の部屋の玄関には優男風の外見の青年が腰を下ろしていた。パ
ーマを当てた紫色の頭髮に黒いテンガロンハットを被り、端正な顔
立ちの半分を眼帯と包帯が覆っている。服装からして休日のガール
ハントにでも繰り出す都会の若者を想起させた。

彼はコンビニの袋から取り出したバウムクーヘンをかじりながら、
なおも世間話の一端の如く学園都市の闇の出来事を軽々^{けいけい}と報告する。

「君が連れ出した『例のお友達』に関しては第七学区の病院で特殊
要人扱い匿名で保護するんだってさ。あと」

柔らかいスポンジの塊を嚥下すると、青年はそれまでの軽快な口
調とは一転した、事務的な固い声で言った。

「『目立った真似をするのは今回を最後にしておけ』」
「……………」

なおも沈黙を貫き通す暦に気を悪くした様子もなく、青年は貼り
付けたような笑顔で指先に付いた菓子屑を舐めとった。

ややあつて暦が漸く口を開く。

「……………それだけか？」

「sonだけ。以上、上層部^{うえ}からでしたー。あ、僕が暦ちゃんの顔拝みに来たってのもあるけどね」

へらへらと軽口を叩く青年に対して、暦は不快そうに眉をひそめた。

「……………その性格でよく今まで生き延びてこられたな、崩音^{くずれおと}」

「僕みたいな人種は公私の区別がちゃんと付くからね」

「それじゃ」と立ち上がった崩音は、ドアノブを握ると「あ、そうそう」と開けっ放しになっているリビングのドアの方に顔を向けた。

「『目立った真似をするのは今回を最後にしておけ』っていうの、

一応僕からのお願いでもあるから」

「……………」

「君が消されたりするのはこっちとしても、まあ、気分が悪いわけだしね。何せ」

「僕ら『マテリアル』の庇護が無きゃ、君みたいな『原石』に学園都市での人権は無いわけだし」

ドアが閉じ、再び暦の自室には沈黙が充満する。

やがて、暦は首をそらして目元を手で覆った。

観測対象から外された箱の中の黒猫の慟哭を知るものは、学園都市には誰もいない。

「そんでその後、どうなったの？」

本日十五回目の同じ質問に辻霧は頭を抱えた。

『履歴閲覧』奪還戦から二十四時間も経過していなかった。当然の如く午前中の授業を二時間目まですっ飛ばして堂々と遅刻してきた辻霧は、その後の午後の授業まで居眠りで脱落していた。昨晚明け方近くまで続いた死闘とその副産物である強烈な疲労を鑑みれば辻霧としては当然の帰結と言えるのだが、ほぼ同じ条件下で澁刺とホームルーム十分前に登校し、あまつさえ全講義を集中して受けていた明日原とは随分な落差が見られる。

というか、向こうがおかしいんじゃないかと逆転の発想に至るも、そこから論理的な根拠を導き出せないほど辻霧は疲弊きつっていた。「いやさつきから言ってるけど……とにかくなんか電気みたいのがどばーなってる……ズドンちゅどーんみたいな」

「……………擬音語多様の説明が許されるのって小学五年生までよ、知ってた？」

呆れたように言う明日原から辻霧は目をそらす。自分でもまだよく分かっていないような能力の仕組みに下手に触れれば、こいつが一気にめんどくさい相手に豹変することは嫌と言うほど分かった。

「……ま、まあ、一応俺らの知らないところでも色々万事解決したらしいし、いいだろ。終わり良ければさ……」

さり気なく話題を逸らす。

辻霧が目を覚ましたとき郵便受けに投函されていた暦からの手紙には、『履歴閲覧』がとある正規の病院でちゃんと保護されたこと、ヴァーダントはもう学園都市には来ないであろうことが簡潔な文章で書かれていた。

あの魔術師が簡単に手を引いたことに辻霧は小さな違和感を覚えていた。曲がりなりにも二度も生死をやりとりした相手

だったし、何より彼の悲願のことを思うとどこか居たたまれない。

しかし、同時に辻霧は暦の文面から何か自分が立ち入るべきでない領分の空気をうっすらと感じていた。

「……どうかした？」

「……いや、別に」

顔を覗き込んでくる明日原をそれとなく押しとどめ、辻霧は暗澹とした気分で校門を潜った。

ともあれ、自分達にとつての非日常は昨晚で終わりを告げたのだ。下手に立ち入るべきではない。日常に、そんな靴紐に対するものと同程度でも、ある程度の愛着を持てるほど自分が成長したことに辻霧は気付いていなかった。

だから。

「……………よお」

「昨晚と地続きの非日常が目の前に姿を現さなければ、それを惜しむくらいはできたはずだった。」

そいつは Y シャツに深緑色のズボンという、一般的な男子高校生の格好をしていた。ダークグリーンのタイに、校章が刻まれた金色のピン。赤みがかった跳ねた茶髪は、濃い眉が目立つ誠実そうな顔立ちにあまり似合っていなかった。

辻霧の後から校門を潜った明日原が、突然立ち止まった辻霧を見て目の前の青年に目を留める。

「真柴^{ましばみ}見教育学院の校章
してアンタの友達……………」

？ あれ、辻霧？ ひよつと

そう尋ねかけた明日原の声が尻すばみに消えていく。

無理もない。

見上げた辻霧の表情は、今まで明日原が見たこともないものだった。別にそれほど長い付き合いではないが、それを差し引いても明日原が人間がこんな表情を浮かべる場面を直に見たのは初めてのことだった。

怒りでもない。恐怖でもない。憎悪でもない。

だが、確かにそこには強烈な嫌悪感と憤怒と悲哀がない交ぜになっていた。

唇が、微かに震えた気がした。

気が遠くなるような時間をかけて開かれた口から、乾いた喉を引き絞るような声が漏れる。

「つ、
橡じようはな………？
橡妃憂きゆうか………？」

非日常の齒車が、再び回転しようとしていた。

終章 後日 Bad / True | End | And . (後書き)

第二話、完結です。

どうにも締まらない終わり方で申し訳ない・・・作者自身、この結末は嫌いです。

ただ今回はトゥルーエンド⇨バッドエンドを主体に書きました。自分では正しいと思った分岐を選択していても、最終的に行き着いた先がバッドエンドっていう。

あと原作との絡みを前回より増やしました（微妙すぎる）。続編があればもっと絡めていきたいです。

それでは。

追記

大幅加筆しました；次の話につながらないので……
次回はずっと鏡大路のターンの予定です

設定2

おいはぎしよみ
及萩暦

> i 1 0 4 1 6 — 1 4 6 7 <

なぜか女子禁制の第一八学区の寮にいた風変わりな少女。辻霧の隣人。

プラチナブロンドの長髪に右目の周りにだけ魔術的なデザインのメイクを施した奇抜な外見。常に黒い長袖の服を着ている。

「けだし〜」という特徴的な話し方をする。一人称は「僕」。

世界に散らばる五十人の原石の一人。能力は分岐世界の全ての自分と体験を同期できる『シュレーディンガーの猫^{ブラックボックス}』。

来日する前の本名はキリエ。

ヴァーダント・ブレイドアクト

> i 1 0 4 1 8 — 1 4 6 7 <

英国の宝剣カーテナの復活のために原石『^{アカシックレコード}履歴閲覧』を狙って学園都市に侵入した魔術師。

チェック柄のマントと大量のピアス、左目の下の青い涙型の刺青に薄茶色に染めた雑草のように無造作なヘアスタイルが特徴。

カーテナの『全次元切断術式』とデュランダルの『現象切断術式』、レーヴァテインの『光の殺戮術式』、フラガラツハの『必殺術式』（いずれも未完成）を取り入れた霊装カーテナⅡレプリカを所持する。

英国騎士団を途中で脱退し、『必要悪の教会』に所属していた過去を持つ。

おまけ

新河 & a m p ・ ヴァーダント

> i 1 0 4 1 9
— 1 4 6 7
<

崩音

> i 1 0 4 2 0
— 1 4 6 7
<

前期期末考査開始直後

> i 1 0 4 2 1
— 1 4 6 7
<

眼鏡明日原

> i 1 0 4 2 2
— 1 4 6 7
<

幻影燈機模式図 (第一話 第五章より)

> i 1 0 7 1 2
— 1 4 6 7
<

設定2（後書き）

梵さんのリクエストに関してはあとで更新します；

あ、ちなみに

ねーちん<<<<<<明日原<新河<美琴<鏡大路<黒子
です。別に何がとは言いませんが。

第一章 八月十四日 Feeling Defeat・(前書き)

諸君、私は百合が大好きだ。

第一章 八月十四日 Feeling Defeat .

第一章 八月十四日 Feeling Defeat .

p . m . 4 時 2 0 分。約一ヶ月振りに外の地を踏んだ鏡大路薪奈かがみおおじ まきなに八月半ばの陽光が降り注いだ。

「また暫くの内に随分と暑くなったものだ……」

日除け代わりに額の辺りに左手をやりながらそう言う鏡大路の背後から、まだ変声期を迎えていない少年の声がかかる。

「薪ちゃん、荷物もうこれだけー？」

「ん？ ああ、そうだった……」

彼女の従弟で風紀委員である逆浦透通さかつうすきとおが、彼自身がすっぱり収まってしまいそうな大きさのスポーツバッグを抱えて病院の正面玄関から現れた。今日のためにわざわざ担当が入っていた本部常駐を空けてもらってきたらしい。

彼の瘦躯を気遣って鏡大路は逆浦の方に駆け寄った。

「すまん。ここからは私が持つから……」

「大丈夫だって。僕はもう男子中学生なんだから子供扱いはよししてよ」

「しかし風紀委員の業務を代わってもらってきているそうだし……」

「んじゃせめてバス停まで」

やけに食い下がり、意地を張るように荷物を抱えたまま早歩きでバス停に向かう二歳年下の従弟に気後れしつつ、鏡大路は彼の後を追った。

先月十二日、鏡大路は逆浦の住む第一八学区で多発していた連続通り魔事件の犯人と交戦して返り討ちにあい、四肢を切断されるという重傷を負った。第七学区のとある医者のおかげで一命は取り留

め、四肢も失わずに済んだものの、思い通りに体を動かすにはやはりある程度リハビリが必要であつたため、術後の意識回復まで一週間、リハビリに約二週間もかかり、現在に至るといわけだった。今では傷もほぼ消え、通り魔事件が学園都市につけた爪痕は今や完全に皆の記憶の中から風化しようとしていた………かに見えた。

しかし、鏡大路の中では事件は何の解決もしていなかった。いや、寧ろ事件の解決が引き金となって、彼女の中に墨滴の如き黒い波紋を呼び起こしていたといつてもいい。

(……不甲斐ない………)

名門常盤台中学校が擁する四十七人の大能力者^{レベル4}たる鏡大路にも、自分の能力が他者を傷つけることに嫌悪の情を禁じ得ないとはいえ、プライドというものがあつた。何かにつけどこか完璧主義的な傾向がある彼女にとっては、今回自分が守ると決めた逆浦に対しても返り討ちにあつたことが情けなかった。だがそれ以上に、

(……あの野郎)

鏡大路が意識を回復した七月十六日、逆浦の口から伝えられたある事実と彼が冗談めかして付け加えた憶測は、彼が病室を出た直後鏡大路が拳を病室の壁に叩きつける衝動を掻き立てるには充分すぎる情報だった。

辻霧単。^{つじきりたん}

鏡大路が常盤台に入学してから間もない頃に出会つたその男に対して抱く感情はかなり複雑なものだったが、彼のそんな自分にも勝るとも劣らない強さに反するやる気のない姿勢には、同じレベル4として闘争心を煽られるものがあつた。

故に、一連の通り魔事件が、よりによって自分が膝をつく結果と相成つた事件が、彼によって終止符を打たれたという真実に、鏡大路は自分自身の能力によって意識を失い倒れ伏すあの瞬間に感じたそれよりもさらに強烈な敗北感を味わつたのだ。

自分は、弱い。

その自覚は、へし折らんばかりに彼女の根幹を揺さぶつた。

我知らず齒を食いしばっていた鏡大路は、前を歩く逆浦が足を止めたことでバス停に着いたことに気付いた。

「荷物」

「おう」

着替えや洗面用具等を小分けにした荷物がぎつしりと詰まったスポーツバッグを受け取る。急な入院だったためにどれくらいの期間入院するのかなどといったことが分からず、後から継ぎ足すように寮から持ってきてもらっていたためにこうなってしまったのだ。

バス停に設置されていたベンチに鏡大路が腰掛けると、逆浦は一瞬逡巡するような素振りを見せたが、彼女の隣に座った。

「まだ大丈夫なのか？ 風紀委員の方……」

「あのね薪ちゃん」

不意に鏡大路の言葉を遮るようにして逆浦が切り出した。今までの彼には見られなかった唐突な言動に、鏡大路は口を噤んでしまう。自分の膝の辺りを見つめながら、逆浦は言葉を慎重に選ぶようにして続けた。

「……今回は運良く生きて戻ってこれたけど、もうあんな無茶はやめて欲しい」

「……………」

逆浦の横顔に違和感を覚える。いや、正確に言えばそれは違和感とは違う……もっと、別な何か。

自分が今まで絶対的信頼を置いてきた人物に、一番自分が触れて欲しくない弱い部分を抉り出されるような。

「薪ちゃんが強いのは分かってる。僕はそんな薪ちゃんを尊敬してるし、よく守ってくれてるのも感謝してる。自分にとって……大事な人間だとも思ってる。けどさ」

その続きを鏡大路は聞きたくなかった。心臓が干からびて縮こまるような彼女の心境が無言で悲鳴を上げるのにも無頓着に、逆浦は言った。

「僕は薪ちゃんが思ってるほど弱くないよ」

「……そんだけ」

そう言って立ち上がると、逆浦は初めて弱々しい笑顔を鏡大路の方に向けた。

「ごめん、何て言つかその……僕は大丈夫だよって。うん、じゃあ、お大事にね」

「……ああ、今日はどうも」

軽く手を振って鞆を担ぎ直し、逆浦はバス停から駆け去っていった。

後に取り残された鏡大路は、挙げかけた片手をそのまま顔の上に持つていくと、内臓を吐き出すようなため息を吐いた。

「最悪だな……」

自分。

ひょっとして、もしかしたら自分は逆浦という自分の庇護の下にあると思い込んでいた弱い存在によって、自分は強いのだと錯覚していただけだったんじゃないだろうか？

ビルの合間から覗く入道雲が、鏡大路の頭を押さえつけるようにして聳えていた。

二度手間をかけなくなかったので、寮に帰る前に常盤台中学の方に寄った。夏休み前の長期入院のせいで前期成績表を受け取り損ねていたからだ。

荷物をロッカーに詰め込んだ後、職員室で担任に心配をかけたことを丁重に謝罪し、成績表を受け取って廊下に出たその時だった。

「……うえ？　かがみんじゃんっ」

清涼飲料水のCMとかに起用されそうな澁刺とした爽やかな声に、嫌な予感を覚えながら鏡大路は振り返った。というか、こんなふざけたニツクネームで自分を呼ぶ人間など彼女の脳内検索エンジンでも一人くらいしか思い当たらなかったもので、それはほぼ確信に近かったということも付け加えておく。

常盤台の制服を着た少女が鏡大路の方に走ってきた。すらりと伸び、程良く日焼けした健康的な四肢が目を引く。今はなぜかしつとりと濡れている茶色味がかつたセミショートのヘアスタイルに、水玉模様のカチューシャがよく似合っていた。

「……久し振りだな、白亜^{はくあ}」

今更ながらルームメイトに退院の日時を知らせていなかった自身の迂闊さに気付く鏡大路。白亜　　白亜由来^{ゆらい}は、やや息を弾ませながら、

「ちよいと失礼」

そう言うのと、突然鏡大路のスカートをめくり上げてその中に顔を突っ込んだ。

「なっ　　！！」

当然の如く繰り出された鏡大路の膝蹴りが顎にクリーンヒットし、廊下に白亜が仰向けにぶっ倒れる。当然白亜の頭にはね飛ばされて鏡大路のスカートの中身も前方に向かって大公開する形となったのだが、幸いぶっ倒された白亜も含め目撃者はいなかった。

「えでで……やだちよつと何するのー」

「こっちの台詞だこの変態！！！！」

やや顔を赤くしながら鏡大路はスカートを押さえ、摺り足で白亜から二メートルほど距離をとる。

「ちーがうつて。傷痕とか残ったりしてないかなーとか気になつてさ。うわ、やだなあかがみんやらしー想像してたでしょ今」

「なら聞けばいいだろ！！　出会い頭人のスカートに顔を突っ込む人間がどこの世界にいるんだ！！！！」

「にゅはは、眼福でした」

側頭部に飛んだローリングソバットは生憎空振りに終わる。

所属する水泳部ではエースとして崇められ、校内でも爽やかな運動部系少女として認知されている白亜由来だが、その実態がこれである。おまけに重度のDMだ。

「お詫びにあたしのパンツ見る？」

「……何の得もないしどうせまた水着だろうが」

「やん、見ない内から言い当てるなんてかがみんエッチー」

三発目の踏みつけは顔面に入ったが（無論靴を脱ぐくらいの配慮はあった）、心なしか白亜が喜んでいようだったので気持ち悪くなくてすぐに引つ込めた。案の定喜色満面といった表情だった。

本人曰く「常に水泳部である心掛けを忘れないため」に常時制服の下は常盤台指定の水着を着用している白亜なのだが、本音はほとんど着ている感触がないからだそうだ。「すーすーして気持ちーじやん」と部屋で言う白亜に蹴りを見舞うこと数多かったが、一々嬌声をあげて喜ぶのもう半分諦めていた。罵倒してもさらにねだってくるし。

外面はいいので余計に質が悪い。

「んーでもちよつと傷つくなー、ルームメイトのあたしに退院日伝え忘れるってさー。お見舞いも行ってあげたのになー」

「んしょつ」と立ち上がった白亜が上目遣いのジト目で鏡大路の顔を覗き込みながら恨みがましく言う。さすがにこれには鏡大路もやや罪悪感を抱いた。

十六日に白亜が文字通り頑丈な病室のドアを蹴破って見舞いにきたことを鏡大路ははつきり覚えていた。あの時は確か散々顔中からありとあらゆる液体を垂れ流しにしながら鏡大路の安否を気遣い、山のような見舞い品を置いて嵐のように出て行ったのだった。たまたま居合わせた逆浦が今し方空飛ぶスパゲッティモンスターでも目撃したような顔をしていたのは記憶に新しい。

「いや……すまん……ちよつと、色々立て込んでたんだ」

気まずい思いをしながら大人しく軽く頭を下げる鏡大路を見て、白亜はなぜかきょとんとしていた。

「……………？ 何だ？」

「いや……………いつものかがみらしくないなあと思ってさー」

と言いつつ白亜はすっかり自分の方に差し出された形の鏡大路の頭をわしゃわしゃと撫でた。

「……………おい」

「にゅはは。いやでもねー、なんか今日のがみんは弱々しい」

ドス、と今し方までの蹴りのダメージが三倍になって腹に突き刺さったような錯覚を覚えた。認めるのは悔しいが、白亜の洞察力は確かに高い。

……………それが鏡大路に対してのみ、ということであれば話はまた別だが。

「ない。そんなことは断じてない」

力なく放られたチョップを白亜が「うりゃ」と弾く。

「うっそだー何かあったでしょー」

「……………」

「じゃあ正直に教えてくれたら忘れてたこと許しちゃう」

ぽんと柏手を打って提案する白亜に、鏡大路はやや躊躇する。

「あ、ほらほらー普段だったらごり押しするくせに」

……………ハメられた。

険悪な表情で自分を睨む鏡大路に対し、白亜は「にゅははー」と笑いながら、

「でも今は水泳部のミーティングがこの後あるのねー。だから寮でね」

そう言っただけで廊下を走り出す白亜。なんだあいつ、素足で校内に上がるなよ。

と思った矢先、白亜が引き返してきた。

鏡大路の制服の襟首をぐいっとつかむと鼻先が触れ合うくらい顔を近づけ、強引に視線を合わせてきた。あまりに唐突だったので鏡

大路は思わずドキリとした。

「あのね」

普段とは違う白亜の口調に気圧される。

「かがみんはもつと他人を信用して、頼った方がいいと思うよー」
そう言い終えると、白亜はべろりと舌舐めずりした。その瞳にいつのまにか普段の悪戯っぽい光が宿っているのに鏡大路がはっと気付いたときには既に遅かった。

「ひゃんっ!!」

白亜の舌がついつと鏡大路の首筋をなぞり、制裁の蹴りを食らう前に離脱する。

にやりと笑みを浮かべたまま脱兎の如く安全地帯まで駆けだした白亜が、廊下の向こう側から声を投げつけてきた。

「ごちそーさまー。お嬢ちゃんいい反応ですなー」

「死ね!!!!!!」

誰もいなくなった夏休みの学校の廊下で、鏡大路は乾いた溜息を吐き出した。

「お帰り」

十分後、足を踏み入れること久しい自身の学生寮に戻った鏡大路に声がかかった。

大方予想は付いていたのだが、エントランスを過ぎたところで寮監が待ち受けていた。いつものクールな表情には、特に歓喜も心配も憤怒も見受けられない。

曰く第三位のレベル5を能力開発を受けていない身の上であるにも関わらず平然と下せるなど、この寮監の蛮勇に関しては色々聞き知ってはいたのだが、よく考えるとこうしてまともに話した記憶は鏡大路にはなかった。精々消灯時間の勧告の際に見かける程度だ。とりあえずぺこりと頭を下げる。

「色々とお騒がせしました」

「構わんよ。兎にも角にも、無事五体満足で帰ってきただけで充分だ」

「は、はい」

寮監はヒールの音も高く静かな威圧感を纏いながら萎縮する鏡大路の方に歩み寄ったが、傲然とした雰囲気反して優しい挙動でぽんと頭に手を乗せた。

「……だが、聞くところによれば一連の通り魔事件の犯人とサシでやり合おうとした結果こうなったそうじゃないか」

「……はい」

「おまえ一人の体じゃないんだ。心配する者もいるだろう。その辺りの冷静さを欠く、軽率な行為だったと思わんか？」

「……深く反省しています」

「分かっているならそれでいい。お前は他人を傷つけないことを最優先に考えるから、余計に孤独に走ろうとする傾向がある。悪い癖だ」

それほど交流の少ない寮監にそこまで見抜かれていたことに鏡大路は軽く驚愕した。寮監はなおも続ける。

「その姿勢に隠された真意は評価に値する。だがな、それによってお前自身が傷つくことを恐れる人間がいることを忘れるようでは、自分勝手と言われても仕方がない。お前も常盤台が擁する四十七人のレベル4の一人だ。そのくらいのことが分からなければ、下にいる者達に示しが付かないだろう」

「……仰る通りです」

今日になって、全く同じことを三度も言われた。唇を噛みしめて俯く鏡大路に、寮監は優しく言葉をかける。

「まあ、今回の事件をもつてお前が成長できれば、それでいい。この失敗を決して忘れるな。それが、私がお前に言える全てだ」

「………はい」

突然寮監は鏡大路の頭に乗せていた手を引っ込めて両肩に手を乗

せると、自分と向き合っていた鏡大路の体をくるりと逆向きにした。
「……………」

まだ事態を理解していない鏡大路に、先ほどまでとは打って変わった厳格な口調で判決が言い渡される。

「さて、お前自身の人間性に関する反省はともかくとして、校則を破ったことに関してはまた別の罰が必要だろう。そうは思わんか？」
寮監の腕が、鏡大路の首にかかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9873m/>

とある次元の幻影燈機

2011年5月17日08時01分発行